

鹿之助の流浪

國亂れて忠臣顯はれ、家惱んで孝子出づとかや。永祿九年月山城陥りてより、私利を見るに敏なる出雲の二股武士、先を争うて毛利氏の軍門に叩頭蟲となりぬ。忠勇無雙なる山中鹿之助も、孤忠空拳また如何ともする能はず。乃ち捲土重來を期し、栖み馴れし故國の空を後に見て、志ばらく形を隠し、諸國を流浪せり。有馬温泉に浴して創を醫し、順禮の姿となりて、去つて東國に赴き、武田、北條諸氏の兵政を觀察し、北國に轉じて上杉、朝倉諸氏の動靜を視つと、時機の到るを待てり。あゝ造次頭沛、猶君家の大事を忘れず。其忠節の益、高きを見るべし。名將言行録に、この間の一消息を傳へぬ。

鹿之助、近江番場の驛に至りけるに、苦しくも降り來る雨か、佐野のわたりならなくに、

日は暮れかよりて、宿かるべき家もなし。志ばしの雨やどりにと、松の木蔭にたちよれば、旅は路づれ、こゝに先程より沙彌二人つれて憩ひ居たりし老法師、鹿之助の様を見て、一人旅のさぞやつらからむ、日は暮れ、雨はふりぬ、行先いそがれずば、今宵は我庵室にとまり給はずやといふに、渡りに船と、好意を謝して、その庵室に往きてやどりぬ。よもやまの話の末、何方をさして行かるよぞ、國はいづく、名は何と問はるよに、人の數ならねば、わざと名乗り申さず、國は出雲、相應の奉公せばやとて、國々を遍歴するものなりと云へば、いかさま尋常の人とは見うけざりき、志ばらく茲に滞留して、美濃、尾張の間に相當の主を求められよといふ、鹿之助その情にほだされて、二三日過しけるに、具足つけたる武士十餘人突然として、この庵室に來る。所化出でよ之に應接すれば、われくは尾張の武士にて、戰場より引上ぐるものなるが、體つかれ、腹へりぬ、休息を許せよ、粥などめぐまれよと云ひ

つゝ、はや庵室に上らむとす。其勢のすさまじさに、一同戦慄して爲さむ所を知らず。鹿之助堪へかねて立ち向ひ、咄、汝等は戦の場をにけたるものか、さもなくば盗賊なるべし、この庵室は桑門の隠家にして、兵士のみだりに立ち入るべき處にあらぬ位の事は、美濃尾張の眞の武士は承知し居るべき筈なるに、無禮にも亂入して物を乞ふは何事ぞ、疾く立ち去れ、去らずば、我にも覺悟ありと云ひつゝ、庭の立石の五六尺ばかりなるを、何の造作もなく引倒し、其上にどツかと腰かけて、にらみつけたり。武士等辟易して、初の勢は何處へやら、知らぬ事とて、無禮しつ、許し給へとて、すゞく立ち去れり。

老法師を始め、一同喜ぶこと限りなかりしが、其夜、武士ども晝間の意趣返しに、庵室の前後より押寄せたり。斯るべしと覺悟して眠らざりし鹿之助、法師一同を一間の中に忍ばせ唯一人にて立ち向ひぬ。まづ表口の床板を引きはなち、戸を破りて入れるものを悉く其中に

落ち込ましめ、其上に床板を敷きて之を壓し、裏口へ廻つて見れば、賊は窓の戸を破りて飛び下らむとす。鹿之助窓のかげに身をひそめ、その飛び下るところへ、わな引きかけて柱に去ばりつけ、斯く去つゝ、六人を生捕りぬ。これにて裏口の賊盡きたれば、又表口にもどり床板少しはづせば、幾んど息することも出来ぬまで壓しつけられて、苦しみもだえし盗賊、我もくゝと順次に出で来るを、一々わな掛けてしぱりつけ、都合十四五人を、刃に血ぬらずして悉く生捕りぬ。

鹿之助之を糺問するに、皆此邊の野武士にて、引剥強盗して世を渡る者なりければ、一々首を刎ねむと思ひしかど、庵室なればと思ひかへして、老僧の意見を問ふに、手を合せて、許し給へと哀訴す。さらば許さむ、心のまゝに出で行けとて、縛を解く。其中の首領と見ゆる男、鹿之助に向ひ、われ等は盗賊とならむとて、生れ落ちたるものにはあらず、唯他に糊

口する道なきが爲め、止むを得ず、盜賊となり下りしもの也、これまで盜みに入りしこと百餘度、大小の戦七十度にも及びたれど、未だ今度の如き恐ろしき目にあひたることあらず、さても御身は何人におはすや、御苗字こそ知らまほしけれ、さは云へ、我等如きものに向つて、よもお名乗りは志給ふまじ、他日事を挙げ給はむ時に、馳せ参り、御身の如き豪傑の手下につかはれて死せむこと、この身の本望也、せめて其時のしる志に何かたまはれと云ふ。鹿之助からくと打笑ひ、何の寢言を云ふぞ、われは此庵室の食客となりて、世を過すもの也、いかで兵を擧ぐるることあらむ、唯疾く去れと云へば、強盜等、名残惜しげに、ふりかへりく立ち去れりとぞ。この事ありてより、老僧等は益、鹿之助をたのもしきものに思ひ、心をつくしてもてなしけるが、出雲武士とあるからは、必ず出雲第一の勇士と聞えたる山中鹿之助ならむと、噂高くなりしほどに、煩はしとて、鹿之助は飄然として立ち去りぬ。

水戸義公

徳川光圀、謚して義公といふ。威公の第三子、家康には孫にあたり。まづ彼が幼時を見よ。威公子多し。その中より擇んで嗣となさむとて、三代將軍、老臣中山信吉を水戸に下らしむ。時に寛永十年、義公年僅に六歳也。諸公子は老臣の來れるを聞きて、みな修飾して出で、接見したれども、義公獨り夷然として平生の如し。信吉を見下して呼んで曰く、老爺大儀、これにても食せよとて、直に盤上の打鯨を把つて之を與へしかば、信吉歎服して、將軍に告げて世子となせりと云ふ。彼は六歳の時、已に大國の君主たるべき風度を備へたる也。七歳の時、他の諸公子と同じく威公に従ひて、櫻馬場にて囚人の斬らるゝを見る。その夜、深更、威公諸公子に謂つて曰く、誰か櫻馬場に至りて、死囚の首を持ち來る者ぞと。諸公子

相顧みて色なし。義公獨り決然として行き、闇を冒し、林樹の間を穿ちて、漸く死首を探り得て持ち歸らむとするに、首重うして堪へ難ければ、毛髮數條を抜きて携へ歸れりといふ。何ぞ其大膽不敵なるや。年十二にして騎を善くし、また酒を善くす。威公試に淺草川にて泳がしめしに、流を亂りて泳ぎければ、その壯なるを感歎しきといふ。飛將の資已に備はれりといふべし。然るに長じては遊治郎となり、大名の身をも顧みず、伊達なる装して、闊歩して大門を出入しぬ。この不可思議なる大怪物が、十八の時、史記の伯夷傳を讀み、己れが兄を越えて立てるとに思ひ至りて、心中ひそかに、跡を長兄頼重の子につがしめ、且つ力を修史につくさむと決したるは、豈殊勝ならずや。『英雄回首卽神仙』、三十一歳封をつぎてより後の義公は、幼時の霸氣を存せず。少時の脂粉の臭をとどめず。一方には仁政を施せる明主也。一方には大義を明にせる良君也。また一方には、文人也、歴史家也、學問の保護神也。

承應三年、二個の美形、京都より水戸侯の邸に下りぬ。これ近衛關白信尋の娘泰姬が、左近の局といふ侍女を従へて、來りて義公に嫁せる也。林間を飛ぶの蛺蝶、花の媒をなして實を結ばしむ。この雙美形は、京都に榮えし文學の花の香の幾分を、關東に移したる蛺蝶にあらずや。安藤年山曰く、『御生質の美なるのみならず、詩歌をさへ好み給ひて、古今集、伊勢物語はそらに覺え、八代集、源氏物語などを能く覺えたまひしとぞ。また三體詩をも諳記したまひけるとぞ』と。これ洵に一世の才女也。その月の梅花に映するを詠じたる詩に曰く、『春宵深月清雲上、梅蕊暈レ香玉滿レ枝、此景有レ誰得レ繪畫、曉風一陣撲レ鼻吹』と。詩は幼穉なれども、これ獨り泰姬を咎むべきに非ず。我國の詩は、茶山、山陽、星巖に至りて、始めてや見るべきものあり。當時は鬚眉者と雖も、満足な詩はつくれず。稍下りて、南郭、白石の徒、一時に名ありと雖も、未だ全く詩の骨髓を得ざりき。況んやその以前の女子をや。

泰姫の和歌に至りては、あはれ深し。

蟬

春秋を知らで過ぎてふ空蟬もおのがあはれや鳴き暮らすらむ

きりくす

鳴きあかす小篠が下のきりくす如何なる節を思ひそめけむ

題しらす

今日はとひ明日はとはるゝ夢の世になき人忍ぶ我もいつまで

病中

梢より争ひおつるもみぢ葉のもろくなりゆく我が身なりけり

辭世

音にのみ聞きしも今日は身の上に分けやのほらむ死出の山道

詞よりもまづ其心を見よ。やさしき女性、躍々として眼前に現はれ来るにあらずや。姫は妙齡わづかに二十一歳にして世を去りぬ。義公に嫁してより四年目なり。「西山公御物語のついで、此御上に及びては、うち志はたれさせ給ひける。御互に御才ありける妹脊の御中らひ如何にむつましくやおはしましけむ」と、年山の記せるを見ても、伉儷の太だ好かりしことを知るべし。義公會て泰姫の方にわたりたるに、夜深うして郭公啼きければ、詠じて曰く、「ほとよぎす啼く一聲に中たえてわたりも果てぬ夢の浮橋」と。泰姫之に和して曰く、「いとよさへ寂しきやどを時鳥うはの空にもおとづるよかな」と。草深かりし東の空に、始めて當年殿上人の風流を見る。歌の巧拙は暫く問はずして可也。泰姫の家集を香玉詠藻といへり。姫の侍女左近局、亦學問才藻あり。長生したれば、そのうた、姫よりは更に圓熟せり。その一例をあぐれば、坐彈しける時、「思ふとも思はぬとしも思はねば思ひの外に思ひ入りぬる」の如

紋事

き是れ也。その家集を蝶夢集といふ。當年の老儒安積澹泊の跋に曰く、「一靜典壺園三十年、内人咸懷其惠。婉孌貞淑、頗通書史、所詠倭歌不下二千首、晚年悉焚其稿、止留三百五十餘首、間作詩、亦焚之、所留和歌、必其可傳者、而所焚未必皆不可傳者、取舍之嚴、毅然而不顧、而處身範物、操守之篤、益可知矣」と。又曰く、「余久辱近侍、熟知其爲人、雖列之於古之烈女、良無所媿、儻使爲丈夫、從容政事之堂、贊襄徽猷、必有可觀、此非余之私言、而輿人之論也」と。以て其の人物才學を知るべき也。

義公が少壯の時、その閨閣に、かゝる二才女の京都より舞ひし事を記せよ。余が茲に二三枚を費して、この二才女の事を説きたるものは、義公が和歌和文の嗜好進境に向つて、影響したる所少なからざるを信すれば也。義公の本領は、もと漢學に在り。雲上の尊き命を被りて詩を賦せしとも、其幾度なるを知らず。然るに一朝翻つて、一臂の力を和歌和文に盡

し、扶桑拾葉集を作りて朝廷に上りしのみならず、更に上古に溯りて釋萬葉集を作るに至りしもの、必ず其素なきを得ず。余は全く、京師より精華の幾分を傳へたる二才女の爲に感化されたりとは云はず。されど、少くとも一線の導火となりしことを疑はざる也。

義公、國史を編まむと欲し、明暦年間、始めて大日本史の稿を起ししが、父威公薨じて封をつぎたる後、彰考館を小石川の邸に置き、儒者のすぐれたる者を多く招致して、大に修史事業に著手せり。其學問に熱心なる、所領の三分の一を擧げて、之を修史の費に充てぬ。且つ當時儒流互に門派を争ひしに、義公儒者を聘するに方りては、唯その學能を問うて、門地を問はず。林門の人をも、闇齋の門下をも、悉く之を容れて、紳々として餘裕ありしは、亦學問の爲に美とすべき也。

寛文十年、林信勝等の編める本朝通鑑成りぬ。義公その稿を見て、我祖宗を吳の太伯とせ

るを非とし、大にその妄を論じて之を删除しきといふ事は、義公の一美事として、水戸派の學者の天下に誇る所也。

貞享三年には、禮儀類典の編輯を始めぬ。大日本史は、大義を明にせむとの意に出で、禮儀類典は、朝廷の廢典を擧げむとの意に出でぬ。二書ともに、義公在世の日には完結せず。寶永七年に至り、水戸中納言綱條、始めて禮儀類典五百十卷、附圖三卷を朝廷に獻じ、享保五年に至りて、義公の孫宗堯、大日本史二百五十卷を獻じぬ。これ義公が、おもに國史のがばに貢獻せる著述也。

延寶六年に、義公扶桑拾葉集を編み、之を仙洞に上りしに、後西院帝之に扶桑拾葉集の名を賜ひ、以て勅選に準ぜられたり。この書三十卷、中古以後、徳川氏の初に至るまでの和文を收め、國文の變遷を知るに便也。冒頭に嵯峨帝の作萬葉集の序を掲げたり。義公後にその僞作なることを知りたれども、最早之を改むるに由なかりしよし、年山紀聞に見ゆ。

赤穂城の明渡し

萬一の變を慮りて幕府の命ずるが儘に、四邊の諸大名それぐ兵を出して境目を守る。その諸大名は、徳島の松平淡路守、岡山の松平伊豫守、鳥取の松平右衛門督、高松の松平讃岐守、丸龜の京極縫殿介、明石の松平左兵衛督、姫路の本多中務大輔などにて、中には兵船を浮ぶるもありて、赤穂の一孤城を中にして、殺氣天地に滿つ。

四月十四日は、始めての御忌日なればとて、大石内藏助を始めとして御菩提所の花岳寺へ參詣して、かたの如く法會を取り行へり。上使の到るも程近し。よろづ内藏助の下知として東は鷹取峠、西は猪池越を限りて、路や橋をつくらひ、中村川には新橋をかけ、村々の火元

を戒め、城下町々の喧嘩口論をかたく禁じ、城内や家中屋敷の掃除に心をつくし、郷村の帳面委細に認め、番所は一々武備正しく守らせ、明け渡しの準備残る限なく行き届きたり。いよいよ四月十八日にいたりて、上使として御目付荒木十左衛門、榊原采女、代官石原新左衛門、赤穂に来る。それと同時に内匠頭の本案なる廣島の淺野家より、使者竝に赤穂の固めとして、軍卒三百餘人、都合五百人來る。戸田采女正、淺野紀伊守、淺野隼人、淺野左兵衛、淺野式部少輔、藝州侯の家老淺野甲斐、上田主水などより、それく使者人數を差し越す。内藏助上使を迎へて、城内に案内す。上使見終りて、城内の事は詞に絶えたり。領内の道路橋梁の掃除等、類も無しと、内藏助に褒美の詞を下して、旅館に引取る。

その夜、内藏助は御見廻りと稱して、小山源吾左衛門、進藤源四郎、奥野將監、吉田忠左衛門、小野寺十内、片岡源五右衛門の六人と共に、上使の旅館に伺候す。上使引見す。内藏

助謹んで言上するやう、さても此度内匠頭儀、御殿中をも憚らず、吉良上野介様へ刃傷に及び、是に依つて切腹仰せ付けられ、畏り奉り候、城地も明日は差上げ申し候て、某式の者共悉く退散仕り候、誠に思ひ寄り申さぬ事にて、一家中の難儀、とかう申上ぐるに詞なく存じ奉り候、殊更遠國へ御出遊ばされ下され候段、千萬御心勞の程、恐れながら推量奉り候、明日城地差上げ申すこと、御安心遊ばされ下さるべく候、此等の趣申上げたく伺候仕り候と云へば、内藏助始め、一家中の當惑、推量に及び候、赤穂領、さては城外、城内の掃除等、見分の處、一つとして越度なく、念の入りし事ども、感心の事に候、明日城受取渡しの事なるが、脇坂、木下の人數、夜に入りて到着せば、城受取渡しは、明後廿日が宜しかるべし、その趣心得よと、上使の挨拶也。言ひたきことは胸にあまれど、暫し抑へて、内藏助等は引きさがる。

十九日の午の刻、いよく受城使來る。大手には、脇坂淡路守三千七百人を率ゐ、搦手には、木下肥後守二千五百人を率ゐて、ひしくと押寄せて陣取る。兩將到着と聞いて、四隣をかためたる諸軍勢、一二里程づつ詰めて寄せて、狼烟あちこちに揚る。上使の差圖にて、受取渡しは、明二十日の曉と定む。夜になれば、篝火諸陣に起り、城内にも起り、海上にも起りて、世にも目ざましき有様也。

内藏助は、明朝までは、城を守らざるべからず。夜更けて、大手の隅櫓に上り、小山源五左衛門、進藤源四郎、奥野將監、中村勘助、近松勘六などに向つて云ふやう、脇坂、木下二侯は、御年若けれども、平生、武道の覺悟ありと見えて、殊の外、軍勢の志まりたる御様子實に感心せり、されど、今少し足らぬ處あり、御慰みに申すべし、第一に野陣を張ること無益にて、軍勢の疲も甚し、到着の日に受取るやうにして來るべき也、第二に、城内事なく相

濟むや未だ計りがたきに、斯く城近く押寄すべくもあらず、名將は十層倍、愚將は二十層倍とは、城を攻むるの古法也、第三に、大將軍の旗本を顯し、日の丸の大提燈押立てたるが、萬一城内に違心起りて、大提燈を目當として大鐵砲を打たば、旗本忽ち破るべし、無謀も亦甚しなど云へば、いづれも成程と感じ入る。面々見給へ、面白き事して、お目にかくべしとて、大手のはさまの内に提燈をともし、西東へ二三度まで火の先を照しけるに、寄手の陣中之を見て、城内に怪しき様子ありと思ひけむ、旗本の大提燈忽ち消えたり。あれ見給へ、寄手の陣中にも心掛けは有りけりと笑ひながら語る。千窮萬苦の中にも、綽々として餘裕のある人哉。

明くれば、卯の上刻に城門を開き、内藏助は、吉田忠左衛門、小山源五左衛門、進藤源四郎、奥野將監、片岡源五右衛門、小野寺十内などと共に町外に出で、上使、代官、受城使

を迎へて、案内す。本丸にいたりて、ひと間く、残らず見せて、一々説明したるが、志を明かすは、今なりとか思ひけむ、謹んで上使に向ひて、恐多き事ながら、内匠頭弟淺野大學頭江戸に罷在り、何卒大學頭を以て、内匠頭の家筋少々にても相立ち申すやう願ひ上げ奉るといふ。上使の十左衛門も、采女も、何とも返事せず。再三に及びけるに、石原新左衛門、委細聞き届けたり、ともかくも相談すべしといふ。内蔵助の心こゝに始めて届きて、有難しとばかりにて、これよりは、また何とも云はず。受城使、上使、代官、上座の間に著座し、内蔵助等數人のおもだちしものを召す。淡路守、内蔵助に向ひ、聞き及びしにもまして要害堅固の城也、殊更、其許始め、よろづの取締よろしく致せしと見え、萬事残る處なし、これを見るにつけても、惜しき家の斷絶痛み入る、心氣を打ち病氣など發し申さぬこそ專一と、情けある詞に、内蔵助等一同覺えず涙をおとす。内蔵助よりは、代々の御朱印、城門々々の

鍵を差上げて、茲に城受取渡しの事は濟みたり。この際城にありし侍は七十人、いづれも思ふまよに立ち去れ、内蔵助だけは、沙汰あるまでは城下を去らざれとの事にて、一同城を出づ。城濠の水、さどなみを寄せて何をかさやく。土手の松、風に動きて、咽ぶが如き聲を發す。君に別れ、城に別れて、一人は西、一人は東、來し方を思ひ、行末を考へて、さすがに猛き武夫も、いかばかり腸を斷ちたりけむ。

神崎與五郎

神崎與五郎は、四十七士中にも、武士に珍らしく、好んで書を読み、歌をよくし、詩を作り、人物も立派、材幹もありて、復讐の擧には功勞も多く、酒も亦剛のもの也。淺草眺望の詩の中に、

回首酒旗風颯々。囊錢空盡拭三涎流。

の句あり。思ふに、これ實況にして、よッほど酒が好きなりけむと、人をして覺えず失笑せしむ。

與五郎は、美作の人にて、茅野和助と同じく、もと伯耆守森長武に事へたり。少年の頃、小鼓を學ぶとて、同藩の佐原十三郎と日々同行す。時に與五郎は年十三、十三郎は十五也。十三郎は近國に沙汰せらるゝまでの美少年也。津山の城下に住める一町人、いたく戀慕していくたびか挑めども應ぜず。可愛さ餘つて憎さが百倍、恨の一刀を十三郎に加へて甘心せむと思ひつめたる匹夫の心根、さても淺ましい哉。或る朝、例の如く二人つれだちて町はづれにかよりけるに、町人あらはれ出で、十三郎に切りかく。驚きて逃げむとするを、何處までも追ひかけて、左の頬を切る。ワツと泣いて倒れ伏す。町人今はこれ迄とて、野路をさ

して逃けて行く。與五郎十三歳ながらも武士の子、町人ばらに友を斬らせて、そのまゝ逃がしてなるものと追ひかけて、見事、三刀にて斬り殺し、留めを刺したり。かくて十三郎は創を受けたるだけにて命は助け、友がよかりし御蔭にて、その場にて仇を討つとを得たり。この刃傷のさまは、畑に耕し居りし百姓どもの實地に見たる證據人もありて、藩主いたく感賞し、父の外に祿を授けて召し出したり。

長武死して嗣なく、其家斷絶せしかば、與五郎は浪人となりけるに、長矩其武幹を聞きて召しかゝへたり。上下の評判もよかりき。一子あり、與太郎といふ。年十二歳になれり。英雄の子多くは豚犬、與太郎は懦弱にして疝ばかり強く、母の愛に狎れて、氣隨氣儘にそだてり。これでは武士となり得べくもあらず、君公に對して相すまずと、心をつくして教訓すれど、とかく母親の盲愛が之を打こはして、武藝もきらひ、學問もきらひ、たゞ漁獵殺生に耽り

たり。或時、あまたの子供と共に釣を垂る。鄰りには近郷の庄屋の子のまだ十歳なるが、同じく釣る。與太郎の針に魚がかよりければ、引きあけむとするに、其釣絲が庄屋の子の竿にからまりて、その爲めに、折角釣りたる魚をにがしたり。我儘にして短氣なる與太郎、下らぬことに、カツと怒りて、釣竿にてさんくくに打つ。庄屋の子なれども、士の魂を有す。其許が自分で釣絲を我竿にからませられたれば、こちらからこそ物言ひを付くべきに、理不盡のふるまひ堪忍ならずと、理の當然を云ふ。與太郎ますます怒り、過言を云ふ不屈者と、刀引きぬきて切らむとするを、庄屋の子、つと進みて、その刀を奪ふ。脇差を抜いて、庄屋の子の鬚を切る。庄屋の子は奪ひたる刀にて横なぐりに拂ふ切先、與太郎の喉笛に當るよと見えしが、與太郎はそのまゝ倒れて息絶えたり。

父の庄屋、子をつれて與五郎の家に行たり、事の由を告げ、悴を御存分に遊され下さるべしと申し入る。與五郎その悴をつくづく見て、年はいくつぞと問ふ。十歳なりと答ふ。與五郎妻を呼び出し、さてくく與太郎はこの子より二つも年上なり、その上にも武士の子にもあるまじく、腑甲斐なきものなり、成長の後も覺束なし、庄屋の悴の年下なるに、斯くむざむざ討たるよは、すべて身の不覺より出でたり、思ひ切り候へと言ひ聞かせ、改めて庄屋に向ひ、我子は斯る不覺者なれば、是非に及ばず、その悴を我に呉れよ、子としてそだてなば、君の御用にも立つべし、いかにぞといふ。悴の命は無きものと覺悟せしに、庄屋風情の子が侍の養子とは、思ひもかけぬ一家の面目、悴の仕合、庄屋父子は天にも上る心地して快諾す。君公に申し上げけるに、君公にも、いたく與五郎の心掛を感賞せり。かくて、庄屋の子は、與五郎の養子となりけるが、惜しや、間もなく病死せり。與五郎とても、我子の死を悲しまざるに非ず。されど、公を先にし、私を後にし、私怨を忘れて、子の敵を養ひ、我君の

御役に立てむとは、あつばれ眞の日本武士也。男の子は、よく母親に似る。思ふに、與五郎の妻は、武士の妻たる資格を備へざる女にて、與太郎は、その妻の氣質を受けたるなるべし。妻も亦擇ばざるべけむや。

泉岳寺の墓域に入りて、すぐ右手に、「刃利教劍信士、行年三十八」とあるは、與五郎の墓也。吉良邸へ討入りし時、大雪なりけるが、與五郎咏じて曰く、

あづさ弓春近ければ籠手の上の雪をも花のふどきとや見む

天鈿女命

高千穂の櫛觸峯はなほ攀づることを得べけれども、高天原は竟に到ることを得ず。茫々たる幾千萬年、物替り、星移りて、世は澆季となりぬ。神代の事、邈として、また知るに由な

きものから、さすがに、めでたき神話の世にたはりて、歴史上に、一條の天梯を架せりければ、皇祖皇宗の偉猷を仰ぎまつるべく、皇室の尊くして國體の淵源あることも悟るべく、上代の人の遺風をも知り得べきは、けに尊きことのかぎりなりけり。

天照大神の叡聖におはせしこと、木花咲耶姫の賢明におはせしことなど、掛けまくも、いと畏し。おしなべて、此時代の女神は、をさく、男神に劣りたまはず。限りなき仁徳を備へて、志かも柔弱無氣力に陥りたまはず。また勇氣あまりありて、志かも、過激粗暴に傾きたまはず。あるは父の尊の仰をかしこみて、よく天下を志ろしめし、あるは夫の尊を助けて蒼生をはぐくませたまひしなど、我國の女徳の基する所の、深く且つかたきを知るべし。

女子の本分は、家庭の主宰にあれども、出でよ君に事ふるときは、躬を鞠し誠を致して、其分を盡さざるべからず。後世の女子、やよもすれば軟弱無氣力に陥り、やよ力あり智ある

ものは、其躬をたのみて粗暴となり、過激となり、所謂おてんばとなるもの多けれども、共に女子の道を得たるものにあらず。また、上代の遺風を傳へたるものにあらず。天鈿女命の如きは、蓋し女子の粉本となるに足るべきもの乎。そは、能く上代の女風を代表したるのみならず、また能く女子の道を得たるものなればなり。

古傳を讀むに、天照大神、素盞鳴尊の暴行をいとひて、天の岩戸に隠れさせたまひし時、高天原みな暗く、葦原の中つ國もことごとく闇く、邪神横行し、妖災荐りに臻りければ、八百萬の神たち、天の安河原に、神集につどひて、善後策を講じたまふ。ことに高御産巢日神の神子に、思兼神と申すは、ことに智慮に富み、工夫に長じたまひけるが、天金山の鐵を取りて、まづ、天津麻羅といふ鍛冶にきたはしめ、つぎに石凝姥命といふ女に仰せて、これより鏡を作らしめたまへり。また、玉祖命に仰せて、八尺の勾瓊の五百津の御須麻流の

珠とて、多くの玉を作らしめたまへり。鏡と玉と己に製造し終りければ、天香山より、いと大なる榊を引き抜き來り、其上の方の枝には、かの御須麻流の珠を懸け、其中程の枝にはかの八咫鏡を懸け、其下の方の枝には白幣青幣を懸け、さて此等をば御幣として、太玉命に取持たしめ、天兒屋命に祝詞を上らしめ、腕力無雙なる手力男神をば、岩戸の側に立たしめたり。そは、天照大神の戸を開きたまはむ時、その力もて、岩を排して出だし奉らむとなり。

かく、天照大神を出し奉らむとする用意とよのひ、諸神の役割も出來たり。残れるは、天照大神の御心を慰め奉るべき方法なり。この役をば、快活にして機智に富める天鈿女命に仰せたまへり。ことに鈿女命、日蔭とて、天香山に生ひたる蔓草を禱とし、正木とて、うるはしき木の枝を折りて、頭に翳し、岩屋の前に覆槽を倒にして、その上にのほり、足拍子

をとりて踏み轟かせり。後世の能舞臺は、やがて此の遺風を取りたるものなり。さて、足はかく覆槽を面白く踏み鳴らし、狐憑などの真似して、衣裳を志どけなく亂し、雪よりも白き胸をあらはし、臍さへ露はして踊るさま、言はむ方なく可笑しければ、八百萬の神たち、覺えず、どつと笑ひどよめきて、高天原も振動するばかりなり。

天照大神、岩屋の中におはして、この笑聲を聞かせて、いたくいぶかしみ給ひ、岩屋の戸を細目にひらきて、内よりのたまひけるは、高天原自から聞く、葦原の中つ國も、みな闇きに、などて、かく鈿女は遊びし、また八百萬神もろくく笑ふぞと問はせたまひければ、鈿女命申さく、汝が尊より優りて貴き神來りたまひしゆゑ、かくゑらぎ悦ぶなりと答へまつる。その時、かねて工みたることなれば、兒屋命、かの榊の中枝にかけたる鏡をさし出せば、天照大神の御姿、あきらかに映れり。天照大神の御顔、もとより輝きてうるはしかりけり。鏡

といふものは、この時はじめて作られたるものなれば、大神は、己れの御顔の映れるものは、知らせたまふに由なく、他に立派なる神來りとのみおほして、好奇心を起したまふのあまり、やゝ戸より出で臨みますときに、かねて待ち設けたる手力男神、得意の力を振ひて、大神を引出したてまつれり。此時に鈿女命が演じたる舞踏は俳優として、後世の歌舞伎の濫觴にして、やゝ滑稽的なれど、其頓智より工夫して、八百萬の神を笑はせて、終に大神を岩戸より出しまるせたるの功は、大なりといはざるべからず。

天照大神一たび岩戸を出でさせ給ひてより、六合もとの如く明かになり、群妖頓に跡をひそめたり。その出でたまひしとき、光明たちまち迸りいで、八百萬の神の御面、一時に白く見えければ、これよりして、面白しといふ詞は起れりと云へり。かく鈿女命は、岩戸の變に大功を奏して、なほ怠らず、いそしみ事へけるほど、天孫降臨の事あるにいたりぬ。

天照大神、吾子瓊々杵尊に、豊葦原の瑞穂の國は、吾子孫の世々王たるべき地なりと、詞よざしたまひ、鏡、玉、劔など、所謂三種の神器を授けて、これを視ること、なほわれを視る如くし、殿を同じうして齋きまつれと宣りたまひて、この日本國にくだらせ給へり。この時、鈿女命は、瓊々杵尊に従ひまつりぬ。かくて旅立ちの御用意とよのひて、出立たむとせさせたまふ時、先驅のものども、還り來りて申さく、天の八衢に、一人の怪しき神おはす。その鼻高くとがりて、長さ七寸もあるべく、背の長さは七尺、口も尻も照りかどやき、眼光炯々として、さながら八咫鏡の如しと申しければ、從神を遣はして、其名を問はせたまへども、みなその威に恐れて、要領を得ず。こゝに、天祖、鈿女命におほせて、汝は手弱女なれど、容貌威ありて、人を服せしむるに足り、且つ交際にたけたれば、とく行きて、我御子の天降りまさむとする路に、誰なれば、かく立つぞと問へとのたまふ。鈿女、單身往いて、此

怪神に而し、先づ衣をくつろけて胸乳を露はし、裳紐を抑へたらして立ち、啞然として大笑せり。是れ蓋し、わざと奇怪の様して、敵の膽を抜くなり。かの怪神も、是迄來りし人とは異なりて、喰へぬ女と思ひけむ、遂に一步を譲り、言葉をやはらけて、如何なれば、かよる様するぞと問ふ。鈿女命すかさず、天孫の降らむと志たまふ路に、汝は如何なれば、かよる様するぞと鸚鵡がへしに問ひ返せば、我は猿田彦神と申す。天孫降臨と聞き、先導しまるらせむとて、こゝに立てるなりといふ。いかなる處にか導くと問へば、日向の高千穂の樾觸峯に導かむといふ。けに、怪神とて恐れし神も、よくく聞けば、王事につくさむとする忠臣なりけり。而して、その忠臣なることを知るにいたりたるも、ひとへに鈿女命の功なり。あはれ、鈿女命の如きは、君命を辱しめざる外交家といふべし。王政維新の際、西郷隆盛、大兵を率ゐて東下しけるととき、山岡鐵舟、幕命を帯びて、往いて訴ふる所あるに、隆盛その脊

を叩いて、笑つて曰く、是迄幕府の命を帯びて来りしもの多かりしかど、徒らに泣いて哀訴するのみにて、事情更に通ぜず、子に逢ひて、始めて事情を詳にすることを得たり、好男子、努めよやと言ひけるとかや。鐵舟の如きは、能く天鈿女命の遺風を學べるものといふべし。

猿田彦神は、大國主神の一人の御子におはす。容貌あやしくて、天狗の面に似たれど、御心はまめやかにして、勤王の志厚ければ、かく出迎へて天孫を導きまらせむとするなり。後世、王舞に用ゐる赤面長鼻の像は、やがて此神の面に象りたるなり。又諸社の祭禮に、此像をつくりて先導するものあるも、此嘉例を傳ふるなりけり。

瓊々杵尊、猿田彦神の言のまよに、遂に日向の高千穂の楳觸峯に降りたまふ。こよに、鈿女命を猿田彦神に下し給ひ、鈿女命に仰せて、猿田彦神の還らむ處まで送らせ給ひければ、

鈿女命は君の仰かしこみて、猿田彦神と共に、伊勢國に下りぬ。かくて猿田彦神は、阿邪訶といふ處に住ひたまひけるが、一日海におほれて、果敢なくならせたまへり。その御子の中に、伊賀津姫と申す姫、伊賀國を領したまひければ、その國を伊賀とは呼びけるなり。猿田彦神の子孫、伊勢國にとどまりけるが、倭姫、天照大神の齋宮を定めたまはむとて、下りたまふ時に、その後裔なる太田命、出でむかへて、さくくしろ五十鈴の川上は、これ大日本國の中にて、ことに勝れたる靈地に侍るとて、導きまらせしも、また、その祖猿田彦神の遺業にならひたるなり。

猿田彦神みまかりたまひたる後、天鈿女命は幼き御兒だちをつれて、伊勢國をたちさり、日向國にのほり来りて、また、もとの如く事へぬ。勅命により、その男神の御名を負ひて、猿女君と呼ばれたり。これまでは、魚類を食したまふ事なかりしが、鈿女命は自ら發明し

て、魚類を奉れり。島の速贄といふは、やがて是れなり。後世、この島の速贄たてまつれる時に、猿女君に分ち給ふためしありしも、その祖鈿女命の功勞を賞したまへるなり。鈿女命のかよることまで發明しけるは、その才智の非凡にして、君につくさむとする心の厚かりしを知るべきなり。鈿女命の子孫は、猿女君といふ名を帯び、其家の女子、出でよ朝廷に事へけり。其職は、先祖の遺業をつぎて、神樂の事にあづかりしなり。又鎮魂祭の儀式をも司りしなり。さらに、大同の頃になりては、猿女君の族減少して、他姓のもの、伴りて猿女と稱して事ふるものあるにいたりしが、弘仁の頃にいたりて、猿女君の眞の血統をつける藤田福貞子を召し出して、つかへしめ給へり。今日にいたるまで、神社に巫女と稱する者ありて、神鈴を振りて神樂を奏するも、また、この猿女君の先祖に胚胎せるなり。まことに鈿女命の如きは、女子の出でよ君につかふる者の模範として、また我が國上代の女風を代表するに足

るべき女傑なりけり。

鎌倉の女性

一

鎌倉時代の女性、上には尼將軍といふ豪傑あり。妬悍なる代りに、よく夫には盡したり。唯氣が強過ぎて、稍思慮の足らざる女性かと思はる。頼朝が富士野に卷狩せし時、長男の頼家まだ十二歳なりしが、鹿を射たり。頼朝使をやりて、之を尼將軍に報ず。尼將軍曰く、將軍の子が鹿を射るぐらゐは、當り前の事なり、何ぞわざ／＼使を煩はすを要せむやと。これ市井の嬖の口吻也。貴女の態度にあらず。弓馬の道といふことは、當時にありては、武人たるものよ第一のつとめ也。殊に源氏は代々弓馬の道に長じて、武士におしたてられたり。頼

家は、年わづかに十二歳也。而して、その鹿を射たるも、たゞ矢を鹿の體に中てたるのみに非ず。羽を呑むまで深く射込みて、射術の精妙、老功の達人も驚歎せし所。これなら、源氏を辱しめずと、頼朝の喜びしは、けに、さもあるべきことにて、尼將軍も源氏の夫人ならば、おとなしく其意を汲んで然るべき也。

二

源頼朝の長女を大姫といふ。頼朝が木曾義仲と和睦せし時、義仲の長子義高、人質となりて鎌倉に来る。頼朝之に大姫をめあはす。義仲の敗死するや、頼朝義高を殺さむとす。大姫之を義高に告ぐ。義高走る。頼朝人をして追うて之を殺さしむ。大姫哀慟して幾んど絶す。頼朝罪を下手人に歸して之を殺す。されど、大姫の哀慟はなほ止まず。頼朝の妹が藤原能保に嫁して生める子高能、鎌倉に来る。頼朝夫妻、大姫に諭して之に嫁せしめむとす。されど

頑として肯んぜず。天下意の如くなりし頼朝も、この可憐なる一少女の貞操を如何ともする能はざりき。

三

鎌倉の勇士仁田忠常病重し。その妻、幼少の頃より三島の神を信じ、爾來毎月必ず參詣しけるが、この際往いて祈りて曰く、妾の命を縮めて夫の病をなほさせ給へと。たま〜洪水起りければ、舟にて江尻の渡戸を航しけるに、逆浪船を覆し、船中の男女、みな悔に沈みけるが、幸にして皆助かりたり。唯獨り忠常の妻のみは溺死したりき。而して忠常の病氣は本復したりき。上古の橘姫と好一對の美談と云ふべきものなるが、知らず、今の世、わが身を殺して、夫の病をすくはむとするの女性ありや否や。

四

大磯の虎、曾我十郎と契る。諸豪、慇懃を通ぜむと欲すれども、みな願みず。和田義盛會て其家に飲む。虎を召して酒を佐けしむ。出でず。義盛怒りて之を罪せむとす。母恐れて、虎を促すこと頻り也。されど終に肯んぜずして曰く、曾我殿は貧寒なり、和田殿は豪貴なり、妾豈に貧富を以て其心を易へむやと。十郎が父の仇を討ちて死するや、虎悲泣して止まず。その三七日の忌日に、箱根山に上りて佛事を修め、葦毛の馬一匹を引き、施物となせり。この馬は、十郎が最期に虎に贈りたるもの也。この日、虎は髪を剃りて信濃の善光寺に赴けり。年わづかに十九。見聞せる僧俗、悲涙を拭はざるは無かりき。後、大磯にもどりて、高麗寺に住めり。

五

鎌倉の將軍頼家、大磯に豪遊せしことあり。一流の妓はみな召したれど、ひとり愛壽のみ

は召さず。愛壽は國色無雙なれば、傍輩ども妬みて、之を頼家に隠したれば也。愛壽口惜しがりて、翌日忽ち縁の黒髪を剃りおとせり。頼家聞いて歎息に堪へず、數多の纏頭を賜はりに、領納せずして、すべて高麗寺に施入して、何處ともなく逐電せり。日本に於ける一種の王昭君也。而して其遁世の事、大小の別はあれど、趣はほど熊谷直實と相似たり。直實を女に志たるものが即ち愛壽にして、愛壽を男に志たるものが即ち直實也。

六

九郎判官源義經の妾となりたる靜御前は、磯禪師といふ名妓の女にして、有名なる白拍子也。吉野までも義經に従ひゆきけるに、僧兵來り襲ふと聞き、義經之に金帛を與へて去らしめ、卒をして護送せしむ。その卒、金帛を奪ひ、靜御前を棄て去る。山僧之を捕ふ。北條時政時に京師に在り。之を母と共に鎌倉に送る。義經の在る所を問へども、固く知らずと陳

ぶ。孕めるを以て、出産までとて、鎌倉にとどめられたり。

靜御前の鎌倉に著きしは、文治二年三月一日、正にこれ花咲ひ鳥歌ふの好時節なるに、絶世の美人、歌舞の生菩薩、風姿楚楚として、はるく關東に下る。當時の人、如何ばかりか目を駭かしたりけむ。頼朝の妻政子、其歌舞を見むことを所望す。病と稱して往かず。賤しき身、もとより云ふに足らざれども、豫州に侍りし上は、恥を衆人の前にさらすに忍びず。この儀だけは許させ給へと哀請す。されど天下の名手なり。たましく鎌倉に来れるに、その藝を見ずしてかへすは、世にも惜しき事なりとて、四月八日、頼朝夫妻、鶴岡八幡宮に詣でたるついでに、靜御前を廻廊に召して、歌舞を奏せよと命ず。今はたゞ別離の憂のみ切也。歌舞せむ空も覺えずと、再三辭したれども、頼朝許さず。止むを得ず起ちて舞ふ。工藤祐經鼓を搦ち、畠山重忠銅拍子を撃つ。靜御前先づ歌うて曰く、

吉野山峰の白雪踏みわけて入りにし人の跡ぞこひしき

又歌うて曰く、

志づや志づ志づの緒環くりかへしむかしを今になす由もがな

前者は、『吉野山峰の白雪踏みわけて入りにし人の音づれもせぬ』の古歌、後者は、『いにしへの倭文布の緒環くりかへし昔を今になす由もがな』の古歌を焼き直したるものなるが、いづれも當意即妙の才を見る。美音妙舞、歌意と心情と渾然相合して、看る者みな感涙を拭ひもあへず。ひとり頼朝のみ心平かならず。八幡宮寶前に於て藝を施すに當りては、關東の萬歳をこそ祝ふべけれ、わが前をも憚らず、叛逆の義經を慕ひ、別離の曲を歌ふこと奇怪なりといふ。されど、さすがに政子は靜御前に對して同病相憐む。君流人の日、わが父時宜を怖れて、君と妾との間を絶たむと志たれど、妾は君に背かず、暗夜に迷ひ、深雨を凌ぎて、

君の所に到りき、石橋山の戦場に出で給ひし時、妾は伊豆山に残り留りて、君の存亡を知るに由なく、日夜たゞ魂を消し侍りき、妾がむかしの愁を顧みて、今の静が愁を知る、豫州多年の好を忘れて戀慕せざらばこそ、貞女の姿にあらざれ、静の其夫を慕ふは、却つて賞翫せらるべきにあらずやと云ふに、頼朝の憤り忽ち解けたり。卯の花重ねの衣を、簾中より出して纏頭とせり。あゝ静御前、貞女の譽と共に、物のあはれを八幡社頭に留めたり。

五月十四日になりぬ。工藤祐経、梶原景茂、千葉常秀、八田朝重、藤邦通等、静の旅宿に就いて酒宴を開き、歌舞を催す。母の磯禪師もまた藝を演ぜり。景茂酔に乗じて、艶言を静御前に通す。静、涙をはらくとおとし、豫州は鎌倉殿の御連枝、われは其妾なり、和主は御家人の身にてありながら、われを普通の女と思ふか、豫州世に榮ゆれば、われと對面せむことだに叶はず、まして、さやうの儀言はるべくもあらずとて應ぜず。静御前ことにますま

す貞女の名をあらはせり。

七月二十九日、静御前男子を生めり。叛逆人の子也。女ならば母に渡さむ、男ならば、殺さざるべからずとて、安達清経をやりて、由比濱に棄てしむ。静御前子を抱いて叫喚したれど、詮なし。政子もあはれに思ひて、頼朝を諫めたれども、採用せられざりき。

義経の胤を殺したれば、今は用なしとて、静御前母子に暇を給ひて、京に還らしむ。時に文治二年九月十九日也。政子あはれみて、多く重寶を與へぬ。東海の天、秋更けて、おく露志けき道芝に、蟲の聲さへ憐れを添へて、世にも薄命なる美人、如何に腸を断ちたりけむ。

七

我國本來の女性は、貞操正しかりき。奈良、平安の朝、支那文明入り來り、ハイカラ風吹きすさみ、世は驕奢に流るゝに及びて、女子の風俗大に亂れたりき。然るに鎌倉時代になり

て、また古に復せり。徳川時代に至りて、武士道盛んなるにつれて、女徳益々正しかりき。明治の世になりては、西洋よりハイカラ風吹き來り、また平安朝の昔に戻らむとす。危い哉。

勾當内侍

國色城を傾くとは、古より云ひならはしたれど、國色あるもの、必ずしも褒似の如き、楊貴妃の如き人のみにはあらず。されば、詩人も、西施もし能く吳國を亡ほさば、越國の亡ぶる時は、又是れ誰ぞとうたひけり。古來、英雄の士の、美人の爲めに其身を誤り、其家を破り、其國を亡ほしたるもの、いと多かり。かく英雄をして失敗せしめし美人の中には、固よりその罪ある毒婦もあれど、また清淨無垢なる淑女なきにあらず。

新田義貞は楠公に劣らぬ忠臣なり。さるに、建武の末、尊氏の敗れて西に走りし時、勾當

内侍との別離を惜しみて、敢て之を追はず、遂に軍機を失ひければ、後世の論者、公を目して不忠となし、且つ罪を勾當内侍に歸するものあれど、そは、義貞にとりては甚だ酷に、勾當内侍にとりては、頗る冤なるを覺ゆ。義貞の尊氏を追はざりしは過失なり。されど、人聖人にあらざるよりは、誰か過失なからむ。義貞の前後の心事行爲を察するに、不忠の跡は、いさよかもこれなく、一たび護良親王の令旨を奉じて、逆賊高時を討たむとて、稻村が崎にいたり、寶刀を把りて海に投ずれば、馮夷も亦その赤心に感じて、潮を退けたりと傳ふ。また、その死に至るまで、猶錦囊書を懐にせしが如きは、精忠君に盡して、至誠日月を貫くものにあらずや。あはれ、その忠、その義、我國の史上、稀に見る所なり。尊氏を追はざりし過失は、或は間接には、君に對して不忠ともならむ。されど、間接の影響まで詮索すれば、楠公が湊川の戦死も、間接には不忠なるかも知るべからず。かく楊枝にて重箱の隅をほじる

が如く、嚴密にとがめだてして、一過失を以て、直に絶代の忠臣を貶するは、忠義の心ある人の所爲とは云ふべからず。

義貞の過失には、勾當内侍の美色も關係せざるにはあらざれど、美色いかでか罪あらむ。内侍はもと窈窕たる淑女なり。内侍の心は清淨無垢なり。決して毒婦にあらず、淫婦にあらず、また城を傾くるの哲婦にあらざることは、内侍が前後の事跡に徴して明かなり。請ふ余をして、少しく語る所あらしめよ。

井戸端の櫻あぶなし酒の酔と云ひけむ。花を折らむとて、誤つて井戸の中に落つ。これ花の罪か、抑、折らむとせし醉漢の罪か。さても勾當内侍は、藤原行房の女なり。年若き頃より召されて宮中に仕へぬ。その姿、楊柳の春風になびくよりも婀娜に、その顔、蓮花の秋水を出づるよりも麗はしきばかりの美人なるに、花前に歌を咏じ、月下に琴を彈するなど、風

流なるわざにも、いと堪能なる才女なりければ、君の御覺も、とりわきてめでたかりけり。

九重の奥にも秋風たちて、御前の眞萩、今を盛りと咲き出でし頃、雁が音わたる宵の空に月の光のいとさやかなれば、内侍堪へかねて、珠簾なかば捲き上げて、ひとり玉琴かきならしけるに、折しも警固に召されて、宮中に伺候せる義貞、そのたへなる爪音に心うごき、はからずも、その麗しき姿を垣間見て、心にはかに惑ひ、流石に鬼をも挫ぐべき英雄の鐵石の腸、忽ち綿よりも、やはらかくなりぬ。

新田左中將とも呼ばるゝ當代第一の武士の、思ひのたけを寄せたる玉章の數々、机の上に山をなすばかりなれど、内侍手にだに取らずして、唯つれなくのみ過せり。そは左中將を嫌ふにあらず、君に仕ふる身の女の正しき道をば、つゆ踏みたがへじと思へばなり。これを以て見るも、内侍の清淨無垢の淑女なりとのことは、推して知らるゝなり。

御門には此事聞して、いと哀れにおほしめされ、左中將を召して、御盃たまひけるついでに、肴にとて勾當内侍をたまひけり。この年月を空にあこがれし左中將の心の中のうちれしさは、如何なりけむ。もとより誘ふ水には落花の情に堪へざりし内侍も、思ひの外なる君の御情を仰ぎて、今更に身を措く處を知らず。思ひ思はれし英雄と佳人の奇縁、空しからずして、今は涙より外に言葉なきも、ことわりなり。

東魚一たびは西鳥を喰ひつくしたれど、獼猴の如きものあらはれて、世は再び亂れ、いたはしや、官軍の旗色次第に悪しく、時利あらずして雕逝かざれば、虞氏の涙も今は何かせむ。左中將今は止むを得ず、志ばし北國に志のびて、再び江東の子弟を集め、地を捲きて重ねて來らむとて、坂本まで落ち行かれけるが、もとより飽きも飽かれもせぬ中なれど、かよわき女の身にて、行路の艱難を冒して遠く落ちゆかむこと、思ひもよらざれば、勾當内侍をば堅

田といふ處に留め置かれけり。雲の上に侍りし上臈の、あれに荒れたる海人の筈屋に身を寄せて、雨風をふせぎかぬるだに、果敢なき身の上なるに、最愛の夫には生別れて、その行方を知らず。君は吉野の行宮に天下をせばめたまふと聞くのみにて、都には豺狼路に横はれるに、左中將に縁故ある身なれば、今日や捕はれむ、明日やさが出されむなど、獨り心を痛むる内侍の身の上、思ひやるだに涙なり。

かくて、その翌年の春には、内侍の父行房朝臣、金が崎といふ處にて、敢なく討たれたまひきと、風のたよりに聞えけるに、さらでだに露けかりける内侍の袖、今は瀧なすばかりにて、我が身も共にと歎かれけるが、良人に先きだちて死なむも、さすがにと、果敢なき命ながらへて、朝暮、北の空をのみ眺めけるに、その年の春も流水と逝き、秋も石火と過ぎ、三年目の秋になりて、漸く左中將よりの音信あり。年頃御身を迎へむとて、苦心しけるに、其

機なくて、今にいたりけるが、この頃やうやく落ちつきたれば、迎の人をまるらする程に、疾く来りたまへとなり。内侍は優曇華の春待ち得たる心地して、輿を飛して柚山まで来りければ、はや左中將は足羽に立出ちたまへりと聞きて、またもや足羽に向ひけるに、淺津の橋にて、瓜生彈正左衛門といふ士の、百餘騎を率ゐて歸り来るに逢ひぬ。瓜生内侍を見て馬より下り、新田殿は御運拙なく、昨日の暮に、足羽といふ處にて、敢なく討たれたまひぬと申しければ、内侍はたゞ夢かとのみ呆れまどひ、輿の中に伏し沈みて、身も浮くばかり泣きかなしみぬ。せめては、討たれたまひし處にゆきて、亡骸だに見奉らむと思へど、敵味方入り亂れたれば、心に任せず。さればとて、左中將の年頃こもりたまひし柚山の城に、中陰の喪にこもらむとするに、はや敵軍寄せ来て、こよも修羅の巷となりければ、それも又かなはず。よくよく果敢なき身の上とあきらめ、なくく送られて京都に歸り、さよやかなる庵

を結びて、あるに甲斐なき露の身を寄せけるが、ある時、都の大路にいでけるに、人多く集りて哭く聲す。何事にかとて立寄れば、こはそも如何に、さきに遙々たづねゆきて、え逢はざりし左中將の首の、空しく怒を含みて、獄門にかよれるなりけり。内侍一目見るより、わつとばかりに泣き倒れ、物も覺えず、日の暮るよまで伏し沈みけり。いつまで歎きたればとて、涙は九泉の底に入らず。この上は、後世の冥福を弔ふよりは外なしと、をよしくも心とりなほして、緑の黒髪をそりおとし、嵯峨の奥の草庵に行ひすましけりとかや。あはれ内侍の尼となりたるは、浮屠氏に淫するにあらず。唯夫の冥福を修めむとてなり。かくまであはれなる境遇に處して、正しき女の道を遂げしを見ても、世に稀なる貞烈の美人にして、決して哲婦にはあらざることを知りうべきなり。

今、西京の西なる嵯峨二尊院の側に、新田義貞の首塚と呼ばるゝ塚あり。こは、義貞の首

の梟せられし時、勾當内侍ひそかに奪ひて、それを葬りたる處なりと云ひ傳ふ。相模の網一色村にも、義貞の首塚と呼ぶるものあり。その塚、酒匂川の側なる民家の裏にあり。高さ一尺ばかりなる石塔立てり。この塚につきては二説あり。其一説は、義貞の臣船田入道なるもの、公の首を奪ひとり、遁れ來りて此地に埋めたりと云ひ、他の一説は、宇都宮泰藤なるもの、公の首を得て、公の故郷新田に持ち行きて葬らむとて、此處まで來りけるが、病にかかりて、自から起つ能はざるを知り、命じて首を茲に埋めしめ、その身も尋いで死せりといふ。義貞は京都に埋められたるか、はた相模に埋められたるか、未だ孰れの是なるかを知らず。とにかくに、惜しみてもかなしむべきは、精忠無雙なる義貞の末路にして、いたむに餘りあるものは、薄命なる美人勾當内侍の身の上なりけり。

お春、お花

佐々木高綱の宇治川に於ける先登、快は則ち快なるを覺え、那須與一の扇の射撃、壯は則ち壯なるを覺ゆといへども、安んぞ二雄當日の心情を追想して、覺えず悲哀の涙に咽ぶものなきを知らむや。扇の射撃、宇治川の先登の如きは、當時は更なり、千載までも傳へて、武士たるものよ此上もなき光榮となし、源平盛衰記を讀むものは、誰も案を打ちて壯快を呼ばざるものなきほどなるに、凡て悲哀の涙に咽べるものは、その境遇の切にして、その心情の至れるを懷へばなり。復讐の事、今や昔年の夢となりぬ。聖代法律の眼孔は、またこれを容れず。時勢の變、また怪しむに足るものなきものから、一片赤誠の至情は、萬古に互りて涙びず。豈にまた古今の別あらむや。物かはり、星うつるに従うて、風俗も亦變るべし。雪中

に笥を掘り、夏夜赤條々になりて、蚊に喰はるゝのみを以て、孝道の本色とはなさず。唯、笥を掘り、蚊に喰れし誠心を取り来りて、これを今日の風俗に應用すべきのみ。復讐の事もまた然り。その境遇の切にして、その心情の至れるを懐はど、儒夫も起ち、怯夫も振ふべし。我邦古來復讐の事多きは、人情風俗の然らしむるところ。嘗に有髯男子のみならず、巾幗の輩といへども、義氣天地を動かし、至誠鬼神を泣かしめ、讐を報し、恨を酬いたるもの、數ふるに違あらざるが中にも、お春、お花、義氣至誠、千辛萬苦を嘗めて、遂に其父の讐を復したる心情の如きは、千秋に傳へて、婦女子の龜鑑となすに足るべきを覺ゆる也。

お春、お花は雙生兒にして、父を茂平と呼び、母をお幹と呼べり。父は常陸國水戸竹原町に住ひ、沖田屋と稱へて、煙草を商ひけるに、性得正直にして篤實をむねと志たりければ、華客次第に増して、家ますく繁昌しけるが、明和二年四月十六日、東照宮の祭禮ありける

に、茂平の住へる竹原町は年番に當りければ、茂平は門に出て、無禮粗忽のなきやうにと、うち群れたる人々を制し、脇目もふらず、いとねもごろに勤めけり。茲に同藩の大番頭にて中川大右衛門と呼びける侍、當日の警固奉行を仰せつけられて、祭典年番の番々を見廻りけるに、茂平が見物人に心配り、いそがはしく駈け廻る折も折、思はず、大右衛門の刀の鞘に當りければ、身をひれふしてその過をわびけれども、大右衛門は短慮の一徹、刀を抜く手も見せず、無残にも茂平を斬殺し、名主に告げ知らせたるまゝ、悠然として立去りけるこそ、いと憎むべき仕業なれ。

此時、お春、お花は芳紀まさに十四にして、水戸第一の祭禮のことなれば、今日を晴れと著飾りて見物に往かむと志けるに、表の方にて俄に物騒がしき人音、さては怪我せし人ありけるかと、母と共に走り出で、見れば、思ひきや、我父の切殺されて息もはや絶えたりとは。

餘りの事に涙も出でず、唯あきれに呆れてありけるが、やがて諸共に亡骸に抱きつき、悲歎の涙に咽びしは、よその見る目もあはれなり。近所の人々に諫められて、死體は家にかき入れつ。盡きぬ歎きに落ちてたぎる千行萬行の血の涙、身の浮くばかり泣き咽びて、友仙の振袖も朽ち果てむばかりなり。あはれ今日こそは楽しく遊び暮さめと思ひしものを、父を失ひては、また何か樂しからむ。父上さま、さぞや無念におはすらむ、昨日までも今朝までも、妾等姉妹をいつくしみ、起くるにつけ、寝るにつけ、よろづ心をくばり給ひて、荒き風にも當てさせじと、一方ならぬ御養育の恩、報ゆるひまもあらばこそ、今父上に別れまらせて誰れを頼みながらへむ、思へば果敢なき浮世かな、如何に侍なればとて、雑沓の折に刀の鞘にあたりたるばかりにて、人の命を斷つ事やはある、けにも胴慾非道の大右衛門と、聲を限りに泣き叫ぶ二人の同胞、母も涙にかきくれて、泣くより外に、せむかたもなく、待ちに

待ちたる祭禮の日を、涙の雨にふりかへて、祝ひにぎはふ鉦太鼓の音も、なか／＼に愁をそふるばかりなり。斯くてあるべきにあらざれば、泣く／＼野邊のいとなみを濟し、供養怠りなく墓前に詣でけるに、四十九日は、またよく内に立ちにけり。

お春お花、名を聞くだにやさし。顔も姿も瓜二つとはおるか、花も恥ぢらふ一對の美人。紅顔春淺くして、一番の東風に匂ひそめたる梅花の蕾ゆかしく、綺羅にだに堪へざる細腰志なやかにして、風になびく青柳の絲かろく、いともしきその顔その姿にも、さすがに心やたけかりけむ。姉妹符節を合したるが如き復讐の一念、修羅の妄執を晴らすは、亡き父上に盡すべき道なるのみならず、母上にも亦こよなき孝行、よしやお宮お信には及ばずとも、親につくす誠心に二つはなし。仇大右衛門は武藝すぐれて、力量あくまでも強しと聞けども、矢竹心の一筋に放てる矢の石にたちたる例もあり。鼠も窮すれば、猫を噛み得ざるものかは。

あはれ、名だよる劍道の達人に就いて學びなば、仇をうつに何かあらむ。母上さまを一人残しまるらするは心掛りなれども、母上さまの實家もあれば、三年の程はお側にはべらすとも安かりなむと、姉妹語り合ひたる末、母にその志を打明しけるに、さすがに初の程はいさめけるが、志のいと切なるにめでと許しけり。お幹一人にては、商賣を爲すことも出来ねば、店をやめて、その實家の弟なる辻田村の良助の許へ移ることと定め、取りあつめたる金子五十兩を姉妹の著物の中に縫ひこみ、支度もそれごとく調ひければ、明和三年五月二十三日といふ日に、別を告げて立ち出づるお春お花、勇める心にも、いとど名残はをしまれて、降りみ、ふらずみ定めなき五月雨に、かたみに絞る涙を添へて、別つ袂や、ひとしほに露けからむ。歸國するまでには、間もあれば、今宵はなき父の墓前に通夜せむとて、姉妹つれだちて父の墓に暇乞の香華を手向け、空しき石塔に向ひて、生ける人に物いふ如く、心のたけを云ひ

きこえ、夜もすがら、彌陀の名號となへつゝ、一夜をあかし、志のよめ告ぐる鶏のこゑに、たち上りて、仙臺へと志しゆく路すがら、武術にすぐれたる人やあると尋ねゆくほどに、湯本といふ湯治場にて、平の城主安藤對馬守の家中なる戸田逸角といふ人の、十八番の武藝に達し、道を守り、義を行ひ、慈悲ふかく、禮義厚きよしを聞き、大に喜びて戸田の家に尋ねゆき、憚る身なれば、わざと實の事はうち明さず。唯幼少にて、親に別れ、後見と頼みたる人心悪しく、家は更なり、田地まで押領せる其上に、あまつさへ、兩女をば流れの廓へ賣らむといふに、せむ方つきて、家出せしものにて、給金などには望みはなく、偏に御奉公こそ願はしけれと頼みければ、妻なる人いたう憐み、その由主人の逸角にもはなして、姉妹ともに召しつかひぬ。かくて兩人は幾重にも主人の意に愜ひて、大望を遂げむとて、身を粉にして働きければ、いよく妻の、あるじの氣に愜ひて、髪結び衣裳の著振より、化粧の指圖ま

で、萬事心をつくされければ、天性の麗質になほ一層の美を添へたり。數月たちてのち、奥方兩女に向ひ、今より表長屋の稽古場へ茶菓子などの持運びは、そなた等に申付くるゆゑ、大身の歴々方へ不調法なきやうにつとむべし、また、兵法の一手位は、女ながらも見習ひ置かば、末々出世の種にもならむと、ねもごろに吩咐けて、日々稽古場へ給仕につかはしければ、二人の美しき容色に、門下の人々思ひをこがし、或は女房に望むものもありて、兩女の取沙汰のみまけるが、兩人は更になまめける風なく、優にやさしき美形の、猛りに猛りたるあらくれ男の中にまじれるさまは、さながら松柏の森に桃櫻の綻へるに似たり。一年あまりすぎけるに、兩人の起居行跡ますます正しく、戸障子の開閉さへ、志とやかにて、下女はしためとは見えざりけり。

戸田逸角の養子に平九郎とよべるものあり。一夜夢破れ、枕を欹て聞けば、勝手の方にて竹刀の音す。耳を澄して聴き居るに、其師匠の極意の手音なりければ、愈々怪みて密かに出で、伺ふに、師匠にあらす、門弟にあらす、兩人の下女の甲斐なくしく禪あやどりて、互に打合ふなりけり。その竹刀の手續、あつばれ他の人の五六年の修業よりすぐれたれば、いといぶかしく思ひつと、翌朝、此事を父に打明しけるに、逸角も合點ゆかず、ともかくも尋ねて見むとて、兩人を人なき處に呼びて問ひけるに、大事の件と胸にひめて打明さざりしが、我れ武門の身にして兵法を教ふれば、下女端女までが武を嗜むと云へば、家の面目なり、そなたども女の業にもあらぬことを、左様に心掛くるは、深き大望あるとならむ、もしさる望あらば包まず明すべし、我等父子後見して能きに計らひ得させむと、いと切なる逸角の詞に、兩人は喜びて身の上を落ちもなく打明しければ、逸角親子はその孝心に感じ、是より奉公はするに及ばざれば、ひたすら稽古のみ致すべしとて教へけるに、半年ばかりにして、其極意

を極めたり。今は敵討に不足なし、近々歸國して、公に願を上げむとて用意しけるに、或日平九郎は門弟たちに向ひて、お春お花の手練を物語り、彼等二人互に立合せむといふに、石山傳内とて腕自慢の侍士ありけるが、女同子にては興薄し、是非身共が真劍を以て試合申さむと勇み立ち、さまざまに止むれども聞かざれば、今は止むとを得ず、まづお春を立會せけるに、傳内はお春の振袖をきり落して勝ちたりと思ひの外、早くも象牙の簪を襟元にうち込まれてありければ、傳内の負となりぬ。こたびはお花と立合ひて、其薙刀の石突の方を三寸ばかり切り折りて、今度こそは勝ちたりと思ひの外、又もや針を三本鬘にうち立てられて、傳内の負となり、重ねぬの不覺いと見苦しければ、みな指してぞ笑ひける。この沙汰後に家中に高くなり、遂に國主の耳に入り、以ての外の奴なりと怒り給ひて、改易の上、追放仰せ付けられたり。傳内只口惜しく思ひ、一圖にお春姉妹に怨を重ね、この遺恨を晴らさむと案

じけるに、兩人の中川大右衛門を敵とせるよしを知りて、兩女にさきだちて水戸に來り、大右衛門にかくと告げければ、前年の刃傷によりて、今なほ閉門なりけるが、娘の事をきよて大に驚き、石山の手を借りて忍びくゝに家具を賣拂ひ、夫婦つれだち、夜に紛れて出奔しけり。

かくとは神ならぬ身の知る由もなく、多年の苦心ややく時を得て、天にも上る思をなし、明和五年三月十八日、戸田親子に別を告げ、勇みにいさみて、故郷に歸りて聞けば、思ひがけきや、仇なる人は既に身をかくして影だになからむとは。せめて母上の恙なき姿を拜みて積れる思ひを晴らさむと樂しみけるに、憐れや、母のお幹は前年の春、病にかよりて果敢なくなりぬ。父既に非命に仆れて、たより少なき身となりけるに、今また母に別れ、その上にも、仇の行方知れずと聞きたる姉妹の心の中や如何なりけむ。殊に母は夫に別れて間もなく

また二人の女にわかれたるより、一層の憂に沈みて病を引起したりと聞きし時の姉妹の心の中や如何なりけむ。我等の身だに、母上の側に侍りしならば、みまかり給ふことはなかりしものを、我等あらざるを苦にやみて、みまかり給へば、手は下さずとも、妾等が殺しまるらせしも同じ事、思へば罪ふかき二人の姉妹、許させ給へ母上様と、同胞共に涙にかきくれ、世を果敢なみて自害も爲かねぬ有様なりけるが、良助夫婦にさまざまに説きすめられて、やうやく氣を取り直し、敵にけたりとて、普天の下王土にあらざる限もなし、六十六州ひろしといへども、力を竭し、身を碎きて尋ねなば、など尋ね得ざる事がある、たゞ一日もはやく敵を討つこそ、母にもわぶるよすがなれ、命のかぎり根限り、両親につくす二人の誠、草葉の蔭より、あはれとも見そなはせ、いざさらば、叔父上さま、叔母上さま、さきくまませと、良助夫婦に暇をつけ、父母の墓前に詣でよ、水をそよぎ、香華をさよけ、袂を聯ねて泣

き伏しけるは、あはれにも、又殊勝なる孝子の心情、立ち去るに忍びずして、袖に志たよる涙を拭ひもあへず、かこちに歎ちてありけるほどに、春の長き日も、いつしか西に沈み、無常を告ぐる山寺の鐘の響に、散りかよる木々の花びら、飛び去り、飛び来りて、袖に點じ裾につく春の夕暮の景色、霞こめたる山下蔭を吹き拂ふ春風だになきこそ、あはれなれ。

お春お花は平なる戸田家に立ちかへり、有りし次第を物語れば、逸角夫婦、平九郎も、中川の卑怯未練を罵り、此上は何國如何なる果までも、尋ね出して本意を達せよ、殊に大右衛門の身は夫婦づれゆゑ、尋ねるには手がよりあり、まづ奥州仙臺邊を探し、心ある人に隨身せよと説きすめらるゝに力を得て、厚く禮をのべて立去り、秋田にいたりて、圖らずも慈悲深き商人の妻の情に引きとめられて、さまざま詮索すれども手掛りなく、兎角するほど、冬になりて、降りつめる雪に往來も出來がたければ、とどめらるゝまよに滞留し、翌年彌生

十三日といふ日に別を告げて發足し、とある峠にかゝりけるほどに、三人の虛無僧の下り來れるに遇ひぬ。その一人は、かの石山傳内にて、他の二人は寬學、雲學とよべる關東の浪人なり。お春お花は、固よりその傳内なることを知らざれども、傳内は早くも編笠の中より伺ひ見て、それと知り、二人の虛無僧に向ひて、あれなる女共の爲に我はかく流浪せるなりとさも恨めしげに言ひければ、短慮の兩人一議にも及ばず、直にかけ上りて、嶺に憩ひ居りたる姉妹に迫りたるに、寬學は、お春の一刀に首足處を異にし、雲學無念と立ちかゝれば、またお花の鋭き霜鋒に大袈裟に斬りさけられて、敢なく息は絶えはてぬ。尙もお春は今一人をも遁すまじと追ひかけたるに、傳内は雲を霞とにけさりて、行方も知らずなりぬ。けに笑ふべきは、寬學雲學の犬死、卑しむべきは、傳内の薄情卑怯、賞むるに餘りあるものは、お春姉妹の武勇と苦節となりけり。

その翌日、お春姉妹は津輕の城下につきぬ。此國の鎮守に、弓弦大明神といふ大社あり。兩女は是に參拜して祈請を凝らしけるに、折柄三人の侍士來りて參詣しけるが、その中の一人は、社殿にかゝけたる發句の額に來水とあるを見て、こは誰なるかと問へば、一人は答へて、去年の秋水戸より來りたる浪士にて、中田大治といふものなりと、いひつゝ立去りけるを、二人の姉妹は洩れ聞きて、ひそかに喜び、去年の秋水戸より來りたる浪士といへば、中川大右衛門に相違なからむ、敵の有所も大概はわかりたり、志かし姉妹一緒に連れ行きては人目に立つゆゑ、是れより別れ々に尋ね出さむと語り合ひ、厭きもあかれぬ姉妹が、敵をうちたき許りに、泣くくも袂を別ち、出遇ふ處を定めて、姉のお春は顔を墨にて塗りよごし膝に馬の脊を結び付けて、膝行兒と姿を替へて、藥王山現昌寺の乞食が原に身を潛めぬ。妹のお花は、家中の花房彦四郎といふ侍に召しつかはれ、身を憤みて仕ふるほどに、主夫婦の

いたはりも一方ならず。行義作法正しきうへにも、世にも稀なる美少婦なれば、家中の取沙汰一方ならざりけり。

ある日、お花は奥方の代参にて、薬師堂に詣で歸るさに、乞兒の姉に逢ひて歸りけるに、その日、中田大治といふ來客あり。こは花房の取りなしによりて此藩に召しかへられたる侍士なり。この度主用を帯びて、江戸へ上らむとするに、その妻當地に慣れざれば、二三日の間、花房の女中をからむとて相談に來りけるに、花房夫婦は異議もなく、十日を限りて、お花を中田の家にぞつかはしける。

その夜の事なりき。中田の家へ道具屋體のもの來りて、豫ねて大治の誂へ置きたる新身の刀を差し出しけり。大治は、ためつすがめつ刀を見守りて、江戸の永代橋邊にて試し斬をなさむとつぶやきけるを、下部の駒藏聞きて、そは江戸にゆかるよ迄もなし、現昌寺の乞食が

原に、此頃來りたる足癩の女を食あり。今夜同所に赴きて、かの女を斬り給ひては如何にといひければ、大治大に喜び、二人つれだちて出でよ往きぬ。

そを聞きたるお花の心は如何なりけむ。現昌寺の乞食が原へ此頃來りたる足癩の女を食とは、疑もなく我姉なり。日頃の手なみもあれば、大治如きものが二人ゆきたればとて、闇々討たるよとはあるまじけれども、若し寢込にても切り入りなば如何にせむなど、起ちつ居つ案じ煩ひけるに、大治は一人にて歸り來り、乞食の女餘程手練のものにて、駒藏はあへなく斬り殺されたれば、復讐せむとて、同勢を催して再びいでゆきぬ。

お花氣も氣ならず、顔へにふるへて在りければ、大治の妻は之をはけまし、武士の家にこのやうなる事は有りがちなり、そなたも武士の家に奉公しながら、何を左様におどくするぞと云ひつゝ、口に任せて、其夫が前年水戸にて沖田屋茂平といふものを斬りたる事を語り

ければ、お花勇んで躍り上り、妾こそその茂平の女なれ、うき身をやつせし甲斐ありて、今日唯今相逢ふこそ幸なれ、不倶戴天の父の仇、のがしはせじと、直に主の妻を蹴倒して柱に縛りつけ、足も空に花房の方へかけつけて事の由を語り、彦四郎と共に乞食が原へ走りゆくに、闇の夜ながら、多年のうき雲茲にはれて、勇める心の中に眞如の月さすがに明かにて、瞬くうちに乞食が原に到れば、お春は多勢を相手に身を構へ、太刀抜き翳して衝立ちたり。花房の來れるに、中田の加勢のものは皆逃げ去りて、中田ひとり茫然としてありけるを、姉妹たちよりて難なく生捕りけるこそ、心地よかりし次第なりしか。

中川大右衛門の中田大治は、一先づ入牢申付けられけるが、津輕侯より水戸侯へ使者を立てられ、今般の次第を届けられければ、水戸藩にてはそれ〴〵評議の末、中川大右衛門は仕置に行ふべきものなれども、お春姉妹の志に免じ、格別の儀を以て立合勝負を許し、那珂の

湊に行馬を走つらひぬ。多年の宿志茲に達し、お春姉妹、中川大右衛門を斬りて父の仇を復しけるは、明和六年八月十四日なり。

仇を復して後、お春は戸田逸角の養子平九郎に嫁し、お花は花房彦四郎の息男彦太郎に嫁し、良助の末子、命によりて沖田屋の家名を相續し、孰れも子孫繁昌しけりといふ。

あはれ、お春お花、容貌うるはしくて萬人にすぐれたり。されど其心は、その容貌よりも更にうるはし。三年餘りも一日の如く、心を一に、父の仇を復せむと志し、女の念力凝りてかよわき手にも、一年ほどに武藝の極意を極めて、男子も及ばぬ技量を有するに至りたるもひとへに孝心の切なるによれり。千辛萬苦を嘗むるも露たゆまず、遂に父の仇を復し、おのおの良縁を得て、末永く榮えけるも、誰れか孝道の餘徳にあらずと云はむ。親に孝なる女にして、夫に不貞なる筈なく、子に不慈なる筈もなし。孝は百行の本といひけるは、洵に千古

の金言なり。お春お花の所爲は、また倣ふべくもあらず。されど其一片至誠の心は、萬古婦女子の鑑なりと云ふべし。

調靜女墓

平替源興夢一場。可憐鳥盡良弓藏。百戰成功歸無家。數奇誰甲源九郎。滿腔衷情向誰說。骨肉恩義亦既絕。鐵騎何度海驛雲。雄心更蹈北陲雪。美人影瘦迷行路。香々山河夢相慕。舞袖枉上鶴陵祠。嬌聲唱出縑絲詞。哀情切々不堪聽。座客相見淚自垂。纔過虎口猶飄泊。征衫秋冷刀水涓。茫茫不見郎君跡。立盡橋畔結柳枝。蒼烟凄風欲昏還。伏白刃川畔村。明眸皓齒空黄土。遺跡唯見古墳存。來六百年。烏雀黃昏也可憐。一路西風吹不絕。滴露和淚灑墓前。



抒情

大原の懐古

明治四十二年一月の初、われ京都に遊びて、滞留すること十日に餘りぬ。大佛殿のあるあたりは、當年平氏が邸宅を構へし六波羅の地、その東の小松谷は燈籠大臣の住みし處、談合ヶ谷は、成親俊寛等が平氏討滅の密議を凝らしたる處、白川の流るゝあたりは、保元の世に修羅の巷となりし處とのみにて、平氏の痕跡、今は求むべくもあらず。去つて鞍馬山に上る。これ義經が少年時代の霸氣を鎖したる處也。毘沙門堂のあるあたりよりは、今の京都は見えず。當年も、六波羅は見えざりしなるべけれども、清盛が別邸を構へたる西八條は見えたるべし。之を見たる義經の心や如何なりけむ。平家の貴公子が殿上に舞袖を翻しよ時、誰か思はむや、鞍馬峰上、劍氣夜凝らむとは。義經の住みし坊、今は跡方も無し。魔王の堂畔、連

りかさなれる石の龜裂したるは、義經の刀痕とかや。峰上に一株の老杉あり。千年以上のもの也。當年の興敗を問へども、木は黙々たり。唯、天風來りて梢をうごかすのみ。

この夜、鞍馬山下の旅店に宿し、翌朝、奴峠を越え、靜原村を経て、大原村にいたる。四方に山を負ひて、田開け、茅屋點綴せる別天地也。高野川の清流、其中央を貫き流る。南に高きは、比叡の四明峰、北に最も大なる比良山は、雪を帯びたり。四明の餘脈、逶迤として北に連り、樹木茂りて、大原の東方を護る。そこに音無の瀧、白玉を躍らし、流れの末、別れて律川となり、呂川となりて、高野川に入る。勝林寺や、三千院や、來迎院や、古寺青苔に封ぜられて、寒磬雲に響く。西の方、茅屋の間を行けば、兩山相迫りて、一道の溪流を壓す。石磴の上、樹木を帯びたる土饅頭は、これ建禮門院の御墓也。一字の古寺を寂光院といふ。建禮門院の住み給ひし處也。堂内に門院の御像ありと聞きたれど、普請中なればと

て、拜觀を許されざりき。

門院が高倉天皇の中宮となりて、安徳天皇を生み給ひし頃は、これ平家の得意の絶頂に達せし時也。誰か圖らむや、國母の御身にして、斯る山里の荒寺に、墨染の御衣を纏ひ給はむとは。安徳天皇には壇浦に死に別れ、還るは、もとの都ながら、御身は、もとの御身におはさず。まばし、東山の麓、吉田の里に、世を避け給ひしが、文治元年、即ち壽永四年五月一日といふ日に、縁の黒髪剃り落し給ひぬ。御年まだ二十九也。

一門の男子は世に盡きたれども、藤原隆房の北の方を始めとし、女の同胞は少なからず。世を忍びつゝ、言問はるゝにつけて、かゝる人々にはぐまれむとは思ひもかけざりしをとて、御涙をおとし給へば、女房達もみな泣く。九月の末に、大原の雲を踏み分けて、こよの寂光院に入らせ給ふ。世をさくるには便よけれど、都に遠ければ、訪ふものとは無し。

十月の十五日といふ日の暮れ方、散りつもれる櫛の葉を踏む音しければ、何人の來つらむと驚かせ給ひつゝ、見れば、人にはあらで、鹿なりけり。大納言佐の局、

岩根ふみ誰かは訪はむ櫛の葉のそよぐは鹿のわたるなりけり

翌文治二年の春の頃、後白河法皇、こゝに御幸あらせ給ふ。その御道筋は鞍馬通りなるが、鞍馬の手前より右に折れて、靜原村を経給ひし也。清盛にこそ御憤はおはしけれ、門院のあはれなる有様を御覽じて、法皇も如何にあはれとおほし給ひけむ。扈從せる後徳大寺左大將實定は、

いにしへは月にたとへし君なれどその光なきみやまへの里

この御幸ありてより五年の後、法皇の崩御に一年先立ちて、建久二年二月の中旬、三十五歳を御一期として、終に果敢なくならせ給へり。大納言佐の局を始めとし、二三の女房、門

院の御菩提を弔ふほどに、その身も、いつしか、相前後して逝けり。春風秋雨七百年、青山美人の骨を埋めつくしぬ。池畔、一樹の汀の櫻、年々空しく咲きて、空しく散る。

一日の土工夫

三日天下とけなせど、三日でも天下を取れば、男子の能事此上もなき次第、其と此とは事變りて、一日の土工夫、半は好奇心に驅られたる者から、さてく牛の糞と人の身の上にも段があればある者なり。

我れ大に旅行を好み、赤貧洗ふが如き窮措大なれば、十分なる旅費とはなく、飢ゑては居酒屋の店頭に矢大臣を學び、疲れては鎮守の森蔭に藁を被りて眠り、醉吟放浪、日に二十里を行く位の事は、何の苦もなかりしが、長き間の事とて、樂しき事も多ければ、苦しき

事もまた多かりき。されど其苦しかりし事も、今にして之を思へば、最早苦しからで、何となく面白く感ぜらる。蓋し回想は詩の美を感ずる所以にして、悲曲の面白きも、多くは之に基く。三寸息絶えて萬事止まむとする斷末魔に、人の一生を回想せば、さすがに憂しと見し世も、今は戀しき思をなすべし。

明治二十二年の夏、僅なる錢を懐にして兩毛に遊びし事あり。上野より午後五時四十分發の汽車に乗り、夜九時宇都宮にて汽車を下り、それより日光まで、未だ汽車は通じ居らず。九里の夜路、而も雷雨激しき空に、傘一つ持たず。油紙被りしばかりの扮装にて、獨り辿り行きて、曉に日光に著し、東照宮を看、裏見、華嚴諸瀑を看、中禪寺を経て、其日の晩、足尾驛に一泊し、翌日庚申山を攀ぢて神戸村に宿し、其翌日神戸村を發して、夕に前橋に來れば、囊錢幾んど盡きて、東京までの汽車賃に五六錢不足なり。まさか汽車賃はねぎる譯に行

かず。儘よ、名山に登り、ついでに妙義山へも登り、旅費は盡くるとも、高の知れた四十里内外の路程、轉んでなりと東京へは歸らるべしと、糞度胸をきめて、高崎まで汽車に乗り、停車場を出で、路を妙義山に取り、今夜は、辻堂を借りて眠らむと心を決し、さて、先づ腹を盈さむとて、町はづれの蕎麥屋に入りて、飽くまでも食ひ、酒も二本倒して立ち出でしが、すき腹に飲みし酒の、まはり善く、ふらくとなれる酔心地に、心も俄に元氣になり、せめて今夜一晚は、ゆつくり宿屋に寢て、明日より本當の野宿せむと、酒の爲に我れと謀反を起して、その夜八時頃、板鼻驛に著きて一泊し、さて翌朝になりて、宿賃だけの錢でもあればよきかと、大に心配せしが、朝食終りて勘定済しよに、六七錢餘りければ、一先づ安心はたたるものよ、これで妙義山へ登りて、東京まで返らねばならぬ事かと思へば、心細き言はむ方なし。昨夜何故野宿せざりしかと、臍を噛めども及ばず。かくて午前十時頃、妙義山

に著きたれど、錢なければ案内者を雇ふ譯には行かず。妙義祠の後より山を攀ちて、大字巖まで上り、暫時眺望して舊路を下り、祠前にて二三錢の駄菓子を買ひて午食に充つ。是に於て囊中餘す所僅に三錢、東京までは猶三十七八里の路程なり。かくて錢は盡きたれど、なほ有名なる石門は見て歸らむとて、更に一里許り深く金洞山にわけ入りて、案内なしに、漸く四箇の石門を絶壁の奥に探り盡くして、歸路に就きしが、再び高崎に返らむとは、いやになりたれば、金洞山より富岡を経て、本莊にて中山道に會する路を取りて、其夜八時頃、富岡驛に來り、餘す所の三錢を以て眞桑瓜二つ買ひて、歩きながら之を食ひ、以て晩食に充つ。是に於て囊中また一文もなし。而して東京までの里程は猶三十里に餘れり。此夜余は桑島に入りて眠りしが、蚊の多きが爲に、夢は忽ち破れぬ。行くこと二三里にして、睡魔また催しければ、今度は稻田の小路の上に臥し、夜半とおほしき頃、眠さめて發足し、以て曉に達す。

路に一川あり。橋錢を取れど、錢なし。水極めて淺ければ、徒歩して之を涉り、十一時頃竟に本莊驛に來る。東京を距ると猶二十二里餘なり。是より中山道を取り、一里許り歩みけるが路に二人の男に逢へり。其一人は年四十餘、脊高く、肉肥え、顔棗に似て赤黒く、尻端折り片肌脱ぎて膏藥張りたる肩を露はし、足には足袋穿かて、直に草鞋を穿き、右手に蝙蝠傘をさしかざすさま、一寸見れば博奕打の親方らしく、一癖ある面魂なり。今一人の容貌は二十五六の年輩にして、仕事師の扮装なりき。さて其四十餘の大男、突然余に向つて、一つ働いて行かずやといふ。其聲破鐘の如し。如何なる仕事にやと問へば、砂利を昇げば可なり。一儲けして行かずやといふ。見らるゝ如く、余は旅費盡きて食に饑うるものなり。その様な仕事して見た事はなけれど、出来るならば爲て見むと云へば、さらば先づ我家まで來れとて導いて其家に至りぬ。言ふ所によれば、此人は土方の親方にして、肩の肉はりたれば、此日

醫師の許にゆきて膏藥を張つて貰ひ、其歸路、一人の子分を得しに、其炯眼また早くも余が路に窮せるを見抜きて、余をも一言の下に其子分とはなしけるなり。

二十餘里の路なれば、翌朝迄には東京に達するを得べけれど、一は早く午食に有りつきて昨朝以來飯一粒も入らざる空腹を醫したく、一はまた土方も一度經驗して見たくて、余は甘んじて土方の子分となりぬ。今一人の二十五六の男は、余より先に子分となりたる本職の土方なり。

親方の家は本莊驛の北半餘里なる沼和田村にあり。一の農家を二分して其一を占む。之に八疊と二疊と都合二間ありて、据風呂も備はれり。五人の子分皆仕事に出でよ、唯一人病氣なりとて家に残り居り、外に女房一人、年三十餘、色黒けれど、目ばツちりとして、世才のきよさうな顔付なり。なほ一人の下女も居りて、これは年十八九、づんぐりと肥りて、不器

量此上もなけれど、流石に鬼もといへる年輩とて、碌に口はきかねど、頬に二つ三つの笑靨を愛想に、人づき悪からぬ女なり。余等一行が其家に著きたるは午後一時頃なりしが、彼の下婢、間もなく午飯を辨じ來て、余等に供す。唯此時の嬉しさは譬ふるに物なく、書生には稀なる大食をなしたれど、大食が常なる土方の家とて、別に怪しみもせず。やがて食終れば親方、我等二人に向ひて、今日は最早働く時間なければ、明朝より働くことよして、勝手に晝寐でもすべしといふに、さらばとて、肱を枕にして、快く午睡に就きぬ。

一夢覺め來れば、夕陽既に西に傾けり。仕事に出でたりし子分ども歸り來りて、風呂よ水よと騒ぎ罵る聲、耳にたちて聒し。二人の子分新に來りし祝とて、夜、團樂して酒を飲む。一獻一酬、耳漸く熱し、醉漸く催す。「土方殺すにや刃物はいらぬ、雨の十日も降れば死ぬ」とあはれに歌ひ出すもあれば、「土方どこ見て何處見て惚れた、出足棄場の程の善さ」と呻る

もあり。または、『よいと巻いた、よいとこ巻けく、朝から晩までよいとこ巻くのも、彼娘や此娘の白粉代だぞ、そりや、よいとこ巻けく』などよ、土方は土方だけに土臭き歌、うたひなどする程に、夜漸く更けぬ。さらばとて、都合八人の子分、八疊に蚊帳一つ釣り、其中に四人つよ二列に、臙を接して眠る。親方夫婦は二疊に臥す。下婢は何處の餘地に臥するや、そこ迄は詮索せざりき。

阿房宮に踏みはだかりて寐た處が、體の及ぶ處は六尺に出ですと云ひけむ。蒸すが如き夏の夜なるに、八疊の陋室に八人の大男、足を伸せば、他の足と相觸ひ、體を動かせば、他の汗臭き體に觸るよなど、窮屈言はむ方もなけれど、疲れはてたる身には茲も淨土、横になるより眠るが早く、正直の頭と共に神の宿りませる罪なき鼾聲、晝間の疲勞を語りつよ、相答へて高し。

明くれば愈々仕事に出掛くべき日なり。親方の肩の痛未だ全く去らざれども、余が爲に相棒にならむとて、力めて行く。仕事場は親方の家を距ること半里許の處にあり。利根川此に至りて、二箇の長き洲の爲めに水脈三分して流れたるを、一流にせむとて、中流に接せる洲の沙石を掘取り、兩端の分流に投じて之を理めむとはするなり。親方は幾人もありて、各數人の子分を率ゑ、場所を定めて仕事をなす。その仕事三つに別れ、沙石を掘り出して之を春に入ると入蹴といふ。二人して其春を昇ぎ出すを根出といふ。また其昇ぎ來れる春を中途にて受取り、更に二人して川邊に昇ぎ來て、其沙石を水に投ずるを棄場といふ。余は親方の相棒に、此棄場の人夫となりて春を昇けり。春の大き三尺四方、石のみ盛りたれば、重きこと甚しく、骨もほとく碎けむばかりなり。此親方といふは甚だ深切にして、快活なる人なるが、始めの一週間は、誰でも泣きたきばかり苦しき事、曾て落拓せる書生を世話して子分

とせしに、始めは大に苦みしが、後には立派なる土方となりしことなど語り、君の體は肉は少なければ、骨太ければ、荒仕事するには倔強なりなどおだて、春を成るべく自分の方へ近く寄せて、前棒なる余をいたはり呉れたれど、如何せむ、慣れぬ仕事と云ひ、殊に空腹にて碌に眠りもせず、歩きつどけたる旅行の疲、なほ癒えずして、肩脚共に疼痛を覺え、幾んど堪へ難く、且つ太陽は赫々として面を照し、流汗淋漓、拭へばまた滴る。その苦しまぎれに、河水を飲んで渴を凌ぐこと幾十回なるを知らず。此でもよく病氣は起らぬ者なり。

働く時間は午前六時に始まりて午後六時に終る。九時に十五分の休息時間あり。十一時半より一時間の休息時間あり。此間、午食を爲し、午睡をも爲すを得べし。三時にも十五分の休息時間あり。みな鐘を鳴して之を報ず。かくて六時に至りて、今日の仕事茲に終り、始めて蘇生の思をなす。夕陽西に傾き、水風面を撫でよ滑かなり。

舎に歸りて風呂に入り、やがて晩食を終へぬ。腰骨は猶灸點するゑらるゝ如く痛めど、舎内の雑沓を避けて、稻田の間に涼を趁はむとて、門を出でむとすれば、一人の土方、後より余が袂を牽きて、御面倒なれど、ついちやつと手紙一つ書いて下されずやと云ふ。それはお安いこととて舎に戻り、烏賊の甲の如く凹みたる硯に、ごすくと音する墨を磨り、塵紙を展べ、禿びたる筆取りあけて、一通書き終れば、又一人來り、私にもといふに、辭みくて、これにも書いてやれば、今一人、私にもどうかといふ。何と言ひやるにかと問へば、右手にて頭を掻きながら、少し言ひにくいと躊躇せしが、もう止せとて、書生さんも今日は疲れたらうからと、親方が鶴の一聲に、又明日願はむとて止みぬ。

初夜、一同眠に就きしが、ふと目を覺せば、客來りて親方夫婦と對話するさまなり。臥して之を聞くに、その客は他の親方の子分にして、仲裁の爲に來れるなり。其仲裁の事柄は、

此親方の家に寓せし一人の子分病に臥しけるが、主の女房の不深切なりとて不平を起し、喧嘩して、去つて他の親方の許に就きしに、そこも亦思ふやうにならねば、前非を悔いて、元の親方に謝せむとて此客を頼みたるものと、詞の端にて知られぬ。親方は、自から見限りて去りたるものを、今更入れるといふ理由なしとて、頻に斷り居りしが、其談判の聲、疲れ果てたる我身には、宛然子守歌うたはるゝが如く覺えて、知らずく眠りぬ。既にして又目をさませば、客既に去りて、親方夫婦互に罵る聲す。蓋し親方は始めは斷りしが、窮鳥懐に入れば、獵夫も之を殺さざる俠氣の、止むにやまれず、終に子分の還るを許したるを、女房は其迄には捌けず。女氣の一徹に、その去りたる子分を憎しと思ひ、終に其子分を許したる夫まで憎くなりて、茲に一場の夫婦喧嘩を始めけるなり。暫く之を耳にせしが、余はまたも眠りて、其後の事は知らず。翌朝子分に聞けば、女房は荷物を風呂敷に包みて、夜の暗きに

唯獨り飛び出して親里へ歸りしとなり。其里は何處なるかと問へば、桐生にて、七八里へだたれりといふ。此後如何にする積りかと問へば、他の親方に仲裁を頼み、桐生まで行きて、連れて来て貰ふ積りなりとなり。されば遠からずして元の鞘に納まるべけれど、子分一人の爲に、百年の契りを割くこと、敝履を棄つるよりも易き此社會の夫妻のなからひ、さりとは果敢なき次第ならずや。

五時過、つれだちて仕事場にゆく。親方は肩痛めりとして行かず。他の子分の相棒になりしが、親方とは變りて、所作いと荒々しければ、肩の痛むこと昨日よりも甚だしく、余は堪へかねて、入蹠の入夫となりぬ、茲には二人働き居りしが、其一人、余に代りて棄場にゆけり。今一人は足一面に腐れ爛れて、異臭鼻を衝いて堪へ難し。暫しは共に働きしが、余は終に閉口し果てよ、九時の休息時間を機會に、舎に歸りて親方に向ひ、折角働かむ積りにて來りた

れど、連日夜行の疲れに、搗て加へて慣れぬ仕事の疲、筆ばかり取る身の、意氣地なくも、最早根も盡きぬ。申譯なけれど、此より辭して歸らむと云へば、今歸れば賃金は取れず。せめて五六日も働きて、東京へ歸る旅費だけでも拵へて行かずやと勸むれど、賃金も何も欲しからず。肩は痛めど、脚は猶健なれば、一夜かよれば東京に著くを得べし。これ迄の厚情は謝するに辭なし。いざさらばとて、立たむとすれば、さらば最早止めはせじ。午飯でも濟まして、腹張らして行かれよといふに、余は其厚意を謝し、暫時休息して、やがて午食を喫して、竟に發足す。親方、余に八箇の握飯と二箇の草鞋とを贈れり。重ね々厚き情に、余は覺えず感涙を墮しぬ。さりとも、妻に去られし親方の心の中や如何なりけむ。

歸路、夜に入りて一人の路伴を得たり。これも金つきて、東京まで野宿して行かむとする人なり。年は三十餘、如何なる素性の人かは知らねど、錢持たぬ身の心安く、共に路端の材木の上に眠り、轉り落ちて目醒め、また起ちて行くに、夜暗うして、遂に其人を見失へり。曉方、食ひ餘したる握飯を探せば、うたてや既に饑ゑて、食すること能はず。荒祠の蔭に臥して、困夢幽谷に迷ふ程もなく、面にそよぐ白雨に、忽ち驚かされ、頼む木蔭に雨洩るつらさ、冷たさと共に身に浸みて、不愉快なること言はむ方なく、空腹を忍びて、漸く翌日の午後四時頃、東京にたどり著きぬ。座に上るより早く、冷飯をかき込みたる時の嬉しさは、萬戸候にも換へがたかりき。

杖銀杏

老木、故國を知る。東京は三百年來の都會、殊に火事が花と云はれたる處なれば、老木は稀れ也。されど、麻布山本町善福寺の杖銀杏の如きは、慥かに千年の老木也。淺草、築地の

兩別院を除きては、善福寺は、關東に於ける眞宗第一流の大刹也。先年、福澤諭吉翁の葬式
こよに營まれたるを以て、殊に有名也。弘法の楊柳水、涸れむとして、親鸞の杖銀杏、今も
なほ生々として榮ゆ。凡そ十圍とも形容すべきか。輪囷にして雄偉、斷じてこれ東京第一の
大木也。

花もみちと一口に云へど、風流を解する者は、花を愛せずして、もみちを愛す。もみちの
中にても、紅を愛せずして、黄を愛す。而して、紅葉の美は、楓之を代表し、黄葉の美は、
銀杏之を代表す。黄葉は詩人に相應しく、仙客に相應しく、寺にふさはし。銀杏ある寺は何
となく尊け也。況んや千年の大銀杏なるに於てをや。

花ある木は、世俗にもてはやさる。然れども、春榮よく幾時ぞ。歲月の波は、紛々たる樹
木を洶し去つて、更にその痕跡を留めず。大木に至りては、歲月の波も、之を如何ともする

無し。大木は實に時代の上に超脱せるもの也。千年の風雪を凌ぎ、人生の興敗を見下し、泰
然として動かす、巍然として卓立し、根は九泉に達し、梢は星辰を宿す。あゝわれ此樹下に
來り、仰いで自然の大なるを感じ、俯して我身の小なるを歎きしこと幾度ぞや。

借問す杖銀杏、むかし了海と親鸞とが、激論せしことを目撃せしなるべし。了海もと一代
の名僧、學徳關東を壓す。親鸞の錫を關東に飛ばすや、大に論を鬪はして、大に敗れぬ。豁
然として悟る所あり。忽ち從來奉じたる眞言宗を棄て、眞宗に歸し、親鸞の高弟となりぬ。
了海の人格、高くして大なる哉。杖銀杏と相呼應して、永く偉大を語る也。

敵として強きもの、味方として強きは、男子の本色也。才を恃むもの、勇を負ふもの、功
に急なるもの、名に執著するものは、一生、小我の域を脱せず。敵としても弱し。味方とし
ても頼むに足らず。子々として自から異を立つるも、やがて、これ時代の波に洶し去らるべ

き雜木也。偉人の事業、既に小我なし。其事業の發展は、更に小我なきものよ手腕に待たざるべからず。佛教の行はるよや、その一部分は、釋迦の力にして、其大部分は、門下の偉人の力也。儒教とても、耶蘇教とても、みな然らざるは無し。辨慶の牛若丸に於ける、ボーロの耶蘇に於ける、みな了海の親鸞に於けると同じく、いづれも男性の本色を發揮せるもの也。あゝ仰ぐべし。了海は、人間に於ける一種の杖銀杏也。

橋守

けに、御身獨力にて、自から金を投じて、自から工夫して、この釣橋を造り給へりとや。御身の事業は、永く後世に傳はらむ。このあたりの住民は更なり、我等の如き旅人までも、萬古御身の恵に浴せむ。事の大小は、必ずしも問ふべきに非ず。余は無能なる大臣よりも、

むしろ有力にして功勞ある村長を偉とす。御身の如きは、山間の一大仁者なる哉。さるにても、この橋を造りあげ給へるまでには、いかばかりの艱苦と戦ひ給ひけむ。日はまだ高し。今宵宿らむ宿屋は程遠からず。今志ばし休息せむ程に、苦しからずば、橋の由來語り聞かせ給はずやと云へば、橋守の翁、白き鬚をひねりつよ、からくと笑ひ、かく褒められては、いと恥かし。この釣橋の由來を云へば、さばかり立派なる動機に基けるには非ず。それを語るむ前に、先づ御身に問はむ。御身は何を樂みに、浮世にながらへて、何の地にか安心立命を得給ひたるといふ。尋常一様の木訥なる老翁と思ひの外、我に問ふ言葉の、いと奇なるに、余は、さながら禪僧にでも對するが如き思ひをなせり。

浮世を夢と見れば、夢なり。現實と見れば、現實なり。百年も短きところあり。十年もながき所あり。玉の臺に住みても、心なほ満足せざるものあるべく、草の庵に住みても、心樂

しきものあるべし。つまり心の持方ひとつにて、浮世はたのしくもなり、又苦しくもなるなり。さは云へ、如何に主觀的に満足すればとて、人に活動力ある以上は、一室にとちこもりてのみも居られず。爲すとは何にても可なり。我が是と信じ、面白しと感ずる事に向つて猛進すれば、よしや之に達する能はずとも、之に近付きつゝある行路が樂しきなり。而してわが所謂安心立命の地も亦此に存す。世の如何なる宗教も、愚夫愚婦に安心立命を得さる方便に過ぎず。われは宗教を信賴する迄に愚なる能はずと云へば、橋守はたと膝をうち、御身の云はるゝ所、我思ふ所と、符節を合す。余生れて七十年、未だ御身の如くわけの分りたる人に逢はず。余はこの世ながら、佛にあへる如き心地す。御身に向ひて、始めて橋の由來を語るべき也。

ひと口に、うちあけて言へば、われは戀愛に驅られて、この橋を造れり。戀愛は、わが理想なりき。御身の所謂是と信じ、面白しと感ずる事に向つて猛進するものなりき。

御身も見て知らるゝが如く、この木曾川は、名だゝる急流の大河、兩岸は削り成せるが如き絶壁、幅は六十間に餘り、矢を射るが如き流水、巖に激して、雪をちらし、萬雷の響を發す。川を隔てゝ、こなたにも村あり。彼方にも村あり。茅屋相對し、鶏犬の聲相聞ゆれども、人は相互に往來すること能はず。彼方に大事ありとも、往いて救ふこと能はず。此方に死人ありとも、來りて弔ふに由なし。たゞ剛膽にして水泳に達したる人のみ、時々渡れりと傳ふるのみにて、目の前に見ゆる鄰村なれども、開關以來、未だ會て婚嫁を通ぜず。さながら海を隔てたる敵國の如くなりき。

われも壯時の血氣、こはいものが見たきたとへにもれず。水泳自慢、膽力自慢の若者二三人と共に、或とき彼方の村におよぎ渡れり。そこに一日、神社に逍遙し、小料理屋に酒のみ

ける間に、世に美しき少女を見たり。されど、たゞ見たるのみ。言葉をだにかはすに由なかりき。

その美人を、今ひと目見むとて、次にはたどひとりにて泳ぎ渡りて、之れを見たり。一度見れば、又一度見たくなり、かくて見ることの度かさなるにつれて、言葉もかはすやうになりたり。されど、彼の美人は、竟に、目には見えて手には取られぬ月の中の桂の如し。當時彼の村にて、鄰村者の我を見ること、維新以前、我國人が西洋人を見しに異ならず。彼の美人には、ふる亞米利加に袖はぬらさじとて自害せし龜遊の如き意氣地はなかりしも、鄰村へは嫁せずと云ふ習慣、いつしか良心となり、また制裁ともなりて、心の中は知らず、うはべには、われを敬して遠ざけぬ。嗚呼木曾の急流、わが六尺の身を遮ること能はざれども、わが戀を遮りけるなり。

はじめは、われ川を恨みぬ。水急なるが故に、相往來すること能はず。相往來すること能はざるが故に、婚嫁を通ぜず。婚嫁を通ぜざるが故に、わが戀はとけざる也。されど、思ひかへせば、川には罪なし。この川に遮らるゝ人間の餘りに不完全なるを歎きぬ。果敢なき人間よ。よしや、鳥の如く飛ぶ能はずとも、何故に我の如く皆一般に泳ぐこと能はざる乎。されど、これ無理なる註文也。老人や、小兒や、婦女や、到底この激流を泳ぎ得べきものに非ず。既に飛ぶ能はず、泳ぐ能はずとするも、人類の智は、果してこの川に往來の具を備ふる能はざるまでに微弱なるもの乎。熱したる恨より進みて、われは冷かなる思索にふけりぬ。我戀の成らざるは、この川を往來することの出来ざる故なり。元來遺恨ある中には非ず。往來することだに出来るやうになれば、自然に婚嫁を通ずるに至らむ。随つて我戀もならむ。されど、如何にして往來することを得べき。舟をつくらむか、舟は激流に沈没せむ。橋を造

らむか、造り得ざるにあらざるも、水は急に、底は危巖なり。工事困難にして、貧村の負擔しがたき費用を要す。われ聞く、かゝる處には、よく釣橋を架くと。釣橋なるかなく。人こよに住みてより幾千年、一の釣橋をだにかくるものなきは、餘りに意氣地なき哉。われは一身をさよけて、釣橋を架けむ。

さは云へ、釣橋をかけむには、技術を要し、又費用を要す。われは鋤を執ることを解す。また多少文字を解す。されど橋を造るの術を知らざるなり。わが財産は漸く衣食をさよふるまで也。到底橋をつくるに足らざるなり。われは村長に説きぬ、富豪に説きぬ。村中の有志家に説きぬ。されど、かなしや、爲益なる事、出来ざる事と、一言の下にはねつけられぬ。進んで郡長に説き、更に進んで知事に説くも、さまで必要ならざるが上に、經費許さずとて用ひられず。天地ひろしといへども、我に同情を寄するものは一人もなき也。當に同情を寄

せざるのみならず、村中擧つて我を馬鹿者と嘲りぬ。よし、我を馬鹿と呼べ。一目に見渡さると山間をわが天地と心得、先祖傳來の小田に衣食し、起きて耕し、耕して食ひ、食ひて眠り、同じ事を、年が年中繰りかへして、草木と同じく朽つるより外には、何等の希望も理想もなき村民輩、いかでわが志を知らむや。いざさらば、われは人の力を假らじ。必ず獨りにて、橋を造らむ。

なつかしや、川の彼岸。わづかに一町をへだてよ、そこに我戀人あり。否、我神あり、佛あり、光明あり、希望あり。曉に望めば、立つ烟にありか志るく、夕にながむれば、かどやく燈火、いたづらにわが胸を焦す。身は此方にあれども、心は彼岸にあり。嗚呼われは自ら進んで、彼岸に達する弘誓の舟を作らざるべからず。

掌大の山間、到底架橋の費用に充つべき奇利を獲るに由なし。われは我戀をとけむが爲め

に、桑梓の地を去らざるべからず。わが燃ゆるが如き胸中、一意たど希望を見て他を見ず。殊に一人も事を解するものなき處と思へば、二十年來住みなれたる故郷も、つゆ名残惜しとは思はず。田を賣り、家を賣り、多少の金を得て、飄然として、故郷を立ち去れり。されど笑ひ給ふこと莫れ。たつ前の一日は、往いて鄰村に逍遙したりき。

利を得むと目ざすは、花の都なれど、いそぐことはなし。まづ健脚にまかせて、諸處の釣橋の構造を観察し、其費用を詳にせむとて、旅行する中に利を得べき方法を考へむものと、まづ越中に赴きて、立山の藤橋を見、四國に渡りて、土佐の韭生の葛橋を見、その他なほ二三箇處の釣橋をも見て、ほど釣橋の造り方もわかれり。費用の多寡もわかれり。従つて儲けざるべからざる金高もわかれり。さて、いよく東京に出でよ、小資本にて、商法をはじめけるが、慣れぬ事とて、資本すりはたして、忽ち無一文の身となれり。されど、われなほ屈

せず。屈せむとすれば、女神われを招けり。

北海道にわたりて、漁業に従事しけるが、思の外に、利益多く、五六年の間に數千圓を得たりしかば、これを用ひて、橋を造らむとて歸る途中、心許して旅館に飲み、暖き夢を結びたる翌朝、懷さぐれば、こは如何に。盜賊や忍び入りけむ、大枚數千圓の金、悉く消えうせて一文もとどめず。またも無一文の身となれり。一時はたど茫然として途方にくれしが、されど、思ひたつたる男子の一念、われなほ屈せず。屈せむとすれば、女神われを招けり。

臺灣に渡りて、また金を儲けたりしが、氣長く小利をたむるは、まだるこしとて、山氣を出したるが失敗のもと、またも折角儲けたる金を失ひ、後悔臍を噛めども及ばず。されど、われはなほ勇氣を鼓して、布哇に赴き、更に亞米利加にまで高飛せり。女神なほわれを招けり。かくてわが青年も過ぎ、壯年も過ぎて、頭上大方二毛となり、一萬餘圓の金を懷にし

て、日本に歸りし時は、年既に六十八歳なりき。二十三歳、故郷を出でよより、茲に四十六年、當年われを馬鹿と嘲けりし人は、幾んど皆な死して、滿目すべて生面なり。變化といふはたゞ之れだけにて、世界文明の波は、茲に及ばず。太郎作は、其父兄と同じく、田を耕す也。木曾川の水は舊に依りて急なり。川を渡るの道はなほ開けず。依然として彼此兩村、互に婚嫁を通ぜざるなり。

四十六年間に儲けたる一萬餘圓を悉く擲ち、二年餘にして、現に見らるゝが如き、この釣橋を造れり。兩村の人はじめて往來するやうになれり。旅人も通るやうになれり。人力車通るも、さまで動搖せず。是に至りて我目的はとげよるなり。一萬圓、小なれども、わが額に汗して、正當に得たる金なり。不正手段によりて得たるものに非ず。詐欺して得たるものに非ず。賄賂を取りて得たるものに非ず。抑も亦義捐寄附等の美名を假りて他の金をつかみ出し

たるものにあらず。山間に小橋を架くること、天下に取りては毫も影響する所なかるべし。されど余にとりては、一大理想なりき。人は愚と云へ、癡と云へ、われの自から適とする所なるを如何にせむ。今や萬金すべて散じつくせり。年老いて、最早や働くこと能はず。止むを得ず、橋のたもとに小屋を構へ、橋賃を取りて、老の餘命をつなぐなりと、語り來りて、喉乾けりとして、溢茶一息に飲む。

多謝す。橋の由來をたづねて、はからずも十年の書を読むにもまさる教訓を得たり。五十年一日の如く、初志に粘著して、かはらず、幾多の失敗と艱難とを忍びて、終に成功したる御身の一生は、我等青年の模範なり、國民の龜鑑なり。さるにても、御身が第一の希望なりし鄰村の美人は、如何にか志給ひたると問へば、さては、御身は年わかきまゝに、戀を神聖なりと思ふこと、なほ商人の黄金に於ける、志士の功名に於けるが如きにや。われは書は讀

まねど、世界を讀めり。功名富貴の迷ひなるが如く、戀も年若き程の迷ひなり。われも人並に、會て戀に迷ひき。迷ひて、七十年の生涯を面白く送られたり。世には戀に迷ひて、家を失ふものあり、名譽を失ふものあり、身を失ふものもあるに、われは戀に迷ひて、釣橋を贏ち得たり。その迷の夢さめて、やつれたる橋守となるも、亦わが適とする所なり。彼の美人は、妻とやなりけむ。母とやなりけむ。姑とやなりけむ。祖母とやなりけむ。はては石塔の主とやなりけむ。美人も、釣橋も、今は我希望の殻なり。又わが一生の快樂の殻なり。眞面目くさりて問ふべきことかはとて、哄然大笑す。

鐵槌

ひと夏ふりつときし雨、ふしぎにも小止み志たれど、なほ泣くが如く曇れる大空の、わづ

かばかりなる隙間をもとめて洩れくる旭口のひかり、おほつかなげに金雞山の一角を射て、妙義山のこなたは狭霧なほふかく立ちこめたる曉しづかに、金雞左に高く天をつらぬき、妙義右に北斗を支ふる間の、名も中の岳とて鼎立の勢いさましく、雲をとびらに代へたる四箇の石門ふかく浮世をへだてたる處なれども、なほ民のなげきを分てるにや、削り成せる巖壁の下に、やせて見る影もなく、戀する少女の涙よりも清き露の白玉、ひとときは滋くおきわたせる山百合の花ふみわけて、石門を出づる一人の男の、大模様染めいだせる單衣一枚の姿もかるやかに、襟元くつろけて、胸毛こよろよく朝風にゆらぐさま、見るから遅しく、頬は赤く、眼は鋭く、一癖あるべき面魂のたどならぬに、博浪沙の昔の志のぼるゝ大なる鐵槌ひとつ、腰につけたるも怪しや。

第一の石門より村に出づるには險しき處なく、たゞ爪先仰ぐばかりの凸凹につれて、うね

うねと熊笹の繁れる中を蛇行する一條の細徑一里餘り歩みて、はや妙義山のふもとに來れば眼界とみにひらけて、手に取る如く見ゆる脚下の村々、今はあさけの時なれど、飢饉のかなしさは、炊烟の上れる家とはなく、鴉だに鳴かぬ山村の曉寂しく、月頃の陰雨に、山氣刃よりも冷かに肌にあみみて、時は夏ながら漸々としてなほ寒く、高根よりおろす風に梢うちふるひて、はらくとこほるよ名残の露滋くして、浮世に露けからぬ隈もなし。田の面には穂だに結ばぬ稻枯れて、半は水に没し、畑に植ゑたる瓜は蔓腐りて、根ながら萎めり。路のかたへに犬のいたく吠ゆるを、何事にかと立ちよれば、あはれや、餓に倒れたる人の屍骸を天の與へとよろこび勇みて、これも餓に死なむとする瘦犬の、よりてたかりて、牙ならして噛み食ふさま、すさまじく、その中に力すぐれたりと見ゆる大犬、他の群犬をおしのけて、われ獨り腹を肥さむとする勢の鋭きに、辟易して尾をまきながら、なほ涎を流して近寄るを、

きつと睨みかへして聲高く呻りつと、こよろよけに飽食するさまのにくらしければ、おのれといひさま、下駄はきたるまよの足あけて、その横腹したよかに蹴たるに、悲鳴の聲長く尾と共に曳きて、二三間にけのびけるが、またふりむきて牙をむきだし、脊中の毛をさかだてて飛びかよらむとする餘勇は示せど、さすがに敵手の強過ぐるを悟りて、まばし思案の末、俄かに横腹の痛さを思ひ出したるが如く、またも悲鳴の聲をあけて、残りをしけなる一瞥を屍骸の上に送りたるまよ、悄々として、にけゆくあとより、側杖くはぬうちにと言ひあはせたるが如く、罪なき他の犬までもうちつれて走り去るを、冷かに見送りつと、巨巖のゆるぎ出したるが如き足元たしかに、のそりくと歩む行手に、五六人の小供、よろくと這ひ出でよ、その旦那さま、どうぞお慈悲に、難儀の者へ一文めぐんでやつて下さりませと、貧が教へたる物乞ひの言葉しほらしく、餓に聲まで瘦せほそりたるも、大飢饉のあまりと、そど

ろに涙を催し、財布より烏目とり出して、それごとく小供に分ち與へ、その喜べる顔を見て、小供衆、少し頼みがある。家へ還つて、親ぢなり、兄なりに、用事があるから、こよへ來いと云うて呉れよ。頼んだぞと、聲やさしく言へば、さすがに餓ゑても小供は小供だけに威勢よく、一人が駆け出せば、他のものもつどいて駆け出すはすみに、一人の小供つまづきて倒れて、わつと泣き出す。男、走りよりて抱き起せば、その顔を見て、身をふるはして泣く。おれの顔はな、こはさうに見えても、何も取つてくはうとは云はぬ。泣くな泣くな、男の兒だと、すかす手元より抜け出でよ、他に遅れじと、又もかけ出しぬ。

水香百姓の腰も軽く、鉢巻片手に、幾たびか頭をさけて、へいへいさきほどは、小供のものへ大枚のお金下され、難有う存じます。へいへいことしの大飢饉にはよわりはてました。わたくしの所では幸にみな生きて居りますが、となりの隠居どのは、くたばつてしま

ひ、そのまたとなりでは、くふに食ひかねて、夫婦別かれをして、やつと乳離れを志せばかりの男の子が、毎日泣いて居るといふやうな始末で、この界限はどこも目があてられず。それにお上からの施しといふものは、ひとつもなく、われらは何時うゑて死ぬるやら、まことに心細うござりますると、うゑてもものんきな癖はうせず、長たらしく饒舌りつどくる處へ、一人來り二人來り、つどいてまた四五人、さきの小供の親だちの外に、何事の起りしかと、ものずきに出かけしものもありて、集れるもの都合十五六人に及べり。

恨を帯びたる目元に、一揆の旗あけかねまじき様子は見ゆれど、餓にやせほそりし腕にはもはや竹槍提ぐる力もなく、骨と皮とのみなるからだに、衣とは名ばかりなるほろをまとひ藍よりも青き顔、つもれる垢に古色を帯びてさながら木像の如く、喉はやせて張子の虎の頸よりも細く、亂髪に大きさを加へたる頭を支ふるも、おほつかかなげなるに、この世からなる餓

鬼道の苦みを見る心地のみせられて、慰めむとする聲も自ら沈み、これはみな衆、御苦勞に存ずる。就ては拙者の所存、ひと通りお聞き下され。拙者もとより此地に縁ものかりもござらねど、この夏以來の長雨に、日の目一度も拜んだことなく、稻も麥も野菜もくさりはてて、こよもかしこも飢饉と聞くが中に、わけて妙義山下一帯の土地は、目もあてられずとの噂にたがはず、まことに何とも申様のなき有様、これまでの御難儀、重々御察し申す。さりながら、狭いやうでも廣きは世の中、一方には金錢つき、食物つきて、餓死する人があつても、一方には、米を山ほど倉に積んで、小判のもちぐさりする人もあり。運は廻りもの、融通はどうにもつかうほどに、浮世はまだ失望したものでござらぬ。拙者はからず茲へまゐりましたからは、及ばずながら一肩入れて見ませう。さるにても憎きは、浮世の有福長者、にこくと笑ふ中にも、金の勘定、腹には絶えず。慾より凝りかたまつた體に、血といふも

のはなく、目尻さけて涎たらすことはあれど、涙をこぼしたるためしなく、人情はお人よしのものもつもの、義理は馬鹿正直者のすること、人を倒してもおのれの利得をはかるが當世とすましこみて、恥も知らねば道理もわからず。とりけだものに劣りたる根性も、平生ならば、大目に見てやれど、この大饑饉に餓死する人を、よそに見てとりあはず、おのれひとり旨い物くうて、人らしい顔して居るのが、氣にくはぬ。學者、お師匠さまなどが、やれ仁義だの、子のたまはくだのと、口を酸くして説いた處で、汚れた人の耳には、蚊がひとつぶんといふほどのきよめも見えず。ふる板にくぎはきかず。腐れた世の中には荒療治も時にとつての方便、これから出かけて、あら膽ひしいでやらう。さりとて亂暴するわけではない。道理をとき聞かして應分の金錢米穀をださせるまでのこと。もし口で説いて、まだわからねば、その時は、腰の鐵槌で説きつける。まづこのあたりにて、金もち物もちと聞えたるは誰々にか。

教へてくだされと云へば、第一に、みつくちとは片輪をそのまよのあざな、本名重左衛門と申しては、知らぬ人もなき物もち、田が千町、山が五百町、米倉が三つ、金倉が二つ、その上に金貸しで、慾張りで、意地わるで、その爲に、われらは飢饉でなくとも、常に難儀して居りますると、衆口一齊にまづ金貸の名をあぐるも可笑し。その次は久兵衛、その次は権八郎、またその次は木村長右衛門、これはこよの名主、先祖よりの由緒ふるきは、門の大榎にも、それと知れて、金はくさるほどあります。さてまた町人では、近藤屋、桔梗屋、酒屋の善太郎など一々告ぐるを聞きて、もうわかりました。金は天下の通用物、はて盗むといふではなし、説いて寄附させるに何も暗い處はござらぬ。どりやこの長い日の睡氣さましにひと働きやつて、なよつ下りまでには歸つてくる。そして寄附させたものは、齊しくわけうほどに、それまでに、この近郷にて饑饉になやむ人達が集つてくるやうに、手分けして吹聴

しては下さらぬか。頼みますと、飽くまでもたかぶらぬ言葉に心の誠も見えて、世にたのものしう聞ゆるに、一同感涙を流して雀躍し、おかけ様でわれらの命がたすかります。ありがたや、かたじけなや、吹聴に手ばかりはいたしませぬ。どうぞよろしう願ひますとて、村人どもは志ばし語りあひしが、やがて五六人、男の前にいで來り、吹聴するには大勢の人もありませぬば、われらは御案内仕りまするとて、さきに立ちてゆくに、男さらばと一禮していでたちぬ。

その後影伏し拜みつと、ひとまづ家へとて歸りゆく中にも、尤も年よりたる源右衛門ことし六十七歳、頭は禿けても元氣は若者にゆづらず。嫁のやうな噂もつて去年女の子を生んだといふ評判男、さすがに老の涙もろく、生き神様といはうか。生き佛といはうか。おりあんだか夢のやうな心地がして、うれしうてくかなしうなつて來たと、志あくりあけて泣き

出せば、これが世にいふ棄つる神あれば、拾ふ神様、われらの運がむいてきた。こんな目出度い時に涙は不吉。さてひとつ相談だが、ふれて廻はるに太鼓でもたよいてゆく方が、便利で、にぎやかで、おまけに面白い。さいはひ村の蟲送りの太鼓が、貴様の處に預けてある筈、それを持ちだして貰はうではないか。いや太鼓はあるにはあるが、雨がもつて、皮がびしょぬれに濡れて、たよいた處が、蛇が呻るほどの音もでない。それよりは、席を物干竿のはしにつけたらどうだ。それはよくあるやつだが、何しろ、この瘦腕に席では重過ぎる。あれ、あそこの物干竿にかけてある赤い巾は、お内儀のゆもじか。そのそばの白いのが貴様の轆鼻禪、そこで源平かけもちの旗とは何と面白い洒落ではないか。それもよからうと、あるじが許す聲の下より、いまよでは何をしてをりしやら、帯紐も結ばぬ衣を手にておさへ、脛もあらはに駈け出す女房、日頃は饑に青くなりしお多福面も、いざとなれば紅禪よりも赤く、そ

れだけは御免とさしだす手を抑へ、旗にされたら、お内儀までも名譽といふもの、何の風が五六匹居た處が、お互ひ同然、恥ではござらぬ。なに、ほしたばかりで、まだ洗はぬとな。それでもかまはぬ。見れば黄いやうな志みがついて居て、處々穴があいて居て、あまり惜しい代物でもあるまい。かまふことはない、暫時借用する。その代りに紅絹の巾を買うて返すと、うれしさのあまり、じやうだんたらしく、幾んど氣違ひのやうに狂ひ、躍るやら、はねるやら、どや／＼と騒ぎて繰り出せり。

紅白の旗は、村より村にとびぬ。施しがあるといふ聲は、耳より耳につたはりぬ。饑饉によわりはてし村々も俄に生氣づきぬ。太郎もこい。次郎も来い。お施しにあづかつて、ついでに生神様のお顔も拜んで来いと、呼びつれて、くりだす男女、ひきもきらず。夕日、金雞山の頂に春く頃は、妙義山の麓は、さながら人の山をきづきぬ。

今かくと待つほどに、歸りくる一隊、はや鎮守の森のかなたに見えそめぬ。雪の上をころがす小石の、見るく大くなるが如く、さきの五六人の案内者に、招かずして加はれる村人おびたどしく、車につみ、馬にのせ、長者の家來に志よはせたる金銭、米穀、さては酒樽、疊々として相連りて、小山のゆるぎいだせるごとく、むかしは八十舟の櫂ほさずもて來し三韓の貢物も、これには過ぎじと見ゆるばかりなり。

山もくづるよばかり痛きたつ歡呼の聲に迎へられて、まづかに、村々のおもだちたる人々をよびよせ、饑饉のさま見るに見かねて、有徳の家々を説いて廻つて、この通り寄附させる次第、ひと通り御話し申します。この村の重左衛門どのとやら、高利をむさほりてよくない人と、まづ第一に出掛けて説いて見たが、中々の口上手、うまく言ひぬけて鏝一文も出す氣はなく、一筋縄ではゆかぬやつと見て取り、躍りかよつて胸ぐらとつて、たよみに押し

つけ、腰なる鐵槌とりあけて、命がをしいか、金が惜しいか。命をしければ金を出せと、威せば、金は御望み次第出します。一命だけは助けてと、蟲のやうなる聲だしてあやまるも可笑しく、思ふ存分、金をださせて、次に久兵衛どのと家に出掛けて見れば、戸を止め、門をとちて、前以ての用心、小憎らしく、鐵槌のつかひ所はことなりと、一息に門の扉をうちくだけ、饑饉のためにお倉の金を所望にまるつた。故障があらば申しいでられよと云へど、ぎうの音もださず。さらば御免と、倉の戸をくだけば、小判の中に潜みし主人、こはくくに這ひいでよ、どうぞ半分だけは残して下されと泣音を出すに、氣の毒になりて、半分で許してやり、それから名主どのと處へのけは、劍客をよびよせて、刃物をもつての手向ひ、小癩なりと、みなたよきつけて倉のものさらけだし、なほ説いて廻はる中に、氣のきよたるは、かなはぬと悟りて自ら金銀米穀をもちだして待つに、少し取りて許してやり、あさはかなるは

御馳走ならべ、綺麗な女に酌させて、言葉巧にかちごとぬかすに、腹が立ちて多く取り、ありとある金持ちに寄附させて取つて来たこの品々、天道は還るを好むとやら、人民の膏血を絞つて取つたものを、またその人民にかへすに、何も不思議はあるまい。拙者がもつて来たと思ふと大きな間違、これは全く天道様がくださるのだ。さあ／＼等分して恨みつこのないやうに、取つたくと、それ／＼手配りしてわかち與へければ、小判を兩方の袂と懐と一杯入れて、なほ慾張りて兩手に握るもあり。餓ゑたるあまりに、米をなまのまよのみこむもあり。お金よりもお米よりも、おれはまづ天の美祿と、樽のかどみくだきて、口つけて鯨飲するもありて、喜びいさみ躍りくるひ、さわぎたつ有様は、たゞ神代のむかし天照大神の天の岩戸を出でたまひし時、八百萬の神だちのゑらぎ笑ひしも、かくやと思はるよばかりなり。

男、このさまを見て腹をよりにて笑ひ出し、これで拙者の氣もすんだ。世の中には、法度とか、おきてとかいふ小むつかしいものがあつて、うか／＼して居れば、安中の城あたりから捕手がむかうて來う。もとより惜しい命ではなけれど、まだ浮世にすることが澤山あれば、このからだは小役人などの手にはわたされぬ。おさらばといふより早く身を躍らして、妙義山の奥にかけゆくに、一同たゞ茫然として、さわぎし聲も俄に去つまり、覺えず手を合せてその後影を拜みぬ。

朝に得たる萬金夕に散じつゝして、わが身に殘れるものとは、もとの鐵槌ひとつ、身をかはすこと飛鳥よりも軽く飄然として立ち去れば、夕の白雲心ありけにその跡を埋めつくしぬ。仰げば高き石門の上、久しぶりの晴天に、磨き出されたる涼月の影さやかなり。

鼠日記

上

夏目の猫は死んだ。元來、猫は、我等鼠族の仇敵だが、夏目の猫は、一度も、我輩に仇した事は、無かつた。この點でも、わが輩は、うれしく思つて居る。今、其猫が、ビールに酔つぱらつて、水甕の中へ落ちて、死んで仕舞つたのを見ては、實に、氣の毒でたまらぬ。むかし、武田の軍がやぶれて、勝頼の首が信長の前にもち出されると、信長は之に唾を吐きかけたが、家康は之に反して、敵ながらも、大將の首だと云つて、丁寧に禮を施したといふ話である。一寸、この信長と家康とのやり口を見ると、信長の方が亂暴で、家康の方が、情誼にあついやうに思はれるが、少し立ち入つて、腹の中をさぐつて見ると、信長の方が、却つ

て正直で、天真爛漫な處もある。家康の方は、形は、如何にも、情誼にあつくて、禮儀を辨へて居るし、まんざら心にも無いことでもなからうが、また、このやうにして、甲斐の國人をなつてやうといふ策畧がこもつて居るかも知れぬ。今、我輩は、畜生たりと雖も、信長のやうな蠻的なことは志ない。人によく思はれやうといふ策畧もない。心底から、氣の毒に思つて、甕のふちに上つて、猫の屍骸に向つて、手をあはせて、伏し拜んだ。南無畜生、頓生菩提、く、く。

我輩は、夏目の猫のみに、この敬意を表するのでは無い。多年、我輩に仇した猫に對しても、これくらゐの敬意を表するだけの度量をもつて居る。夏目の猫の最期の覺悟は、まことに見事であつたと、我輩は敵ながらも、感服せざるを得ない。もがいて見たが、到底駄目と悟つて、落ちついて、心しづかに死んだのは、あつばれ、大人君子の態度である。今の世の

拵情

四九五

修養のない厭世者、煩悶者に、少し丸薬にでもして飲ましてやりたい。こんな點になると、我輩は、平生、猫以上の覺悟があるつもりだ。馱法螺ぢやない。まあ我輩のやうな鼠の身にもなつて見給へ。人間は、我輩に對して、常に惡意をもつて居る。猫を使つて、我等を平けつくさうとして居る。殊にベストが流行りだしてから、我輩の首は、毎日、交番所の巡查の實檢に供せられる。死馬の骨五百金とは、むかしの話に聞いたが、あはれや、我輩死鼠の骨は、わづか五錢、それでも慾に目のない世上の人間、わづか五錢の目くされ金に迷うて、どしどし我輩を征伐しにかゝる。斯様に、我輩は四面皆敵の中に生活せねばならぬ。わが輩の命は、風前の燈よりも果敢ないものである。實に苦しいとも、つらいとも、何とも云へない境涯であるが、その代り、死といふ問題は、平生研究して居る。否、研究せざるを得ぬ。明治太平の世に生れた、弱蟲の人間こそ、自分が命が惜しいと思ふ心から割り出して、死の

問題を非常におもく見て居るが、むかしの武士では、御馬前の討死といふ事は、生れた時から覺悟せねばならぬ。死ぬることは、何でもない。命は、いつでも、のし付けて進上するつもりで居る。日本人が戦争につよいのは、この心がけがあるからだ。そこへ行くと、我輩も、大に日本武士的だ。いつでも、命は進上する。それも、四面皆敵の苦しい境遇から、自然に養成せられたのである。たつた五錢では情けないが、もつと價があつて、死馬の骨の五百金とまでは行かすとも、せめて、二三百金になるなら、我輩はいつでも死んであける。こそこそ臺灣の彩票を買ふお方の爲めに死んであげませう。懸賞小説にうき身をやつすお方の爲めに死んであげませう。金故に男を賣るお方の爲めなら、なほ更死んであげませう。

夏目の猫は、わが輩にとつては、恩人である。然し、恩は恩、缺點は缺點として、わが輩が、公平に判斷を下して見ると、夏目の猫は、猫としては、あまり褒めたものでは無かつた。

鼠を取るのが、猫の本職と、古來相場がきまつて居る。然るに夏目の猫は、鼠を取らずに、頻りに、下らぬことばかり、志やべりつゞけた。之を人にたとへると、文士見たやうなものだ。何等の智徳もなく、見識もなく、たゞ青年戀愛の情にかられて、少しばかり、女の衣服言語を觀察せるを、楯にとりて、國民たるの本分は、つくさずに、筆とりて、下らぬ觀察をかきこねるが、今の文士といふものであるが、夏目の猫は、丁度、それと同じ事だ。然し、門前の小僧、ならはぬ經をよむ。夏目の猫は、主人が學者であつて、さつぱりした、脱俗した處があるだけに、今の世の文士連中よりも、もそつと、氣のきいた、面白い事を云つて居る。あのあんばいで進んでいつたら、もそつと氣のきいた、面白い事を、ぞくぞく言ひだすであつたらうに、俄に死んで仕舞つて、實に惜しいことを志た。

一たび、夏目の猫が、志やべり出してから、馬だの、犬だのが、眞似をして、志やべるやうになつたが、我輩も、猫を弔ひかたぐ、眞似して、志やべつて、胸中の磊塊を吐露して見やうと思ふ。元來、わが輩は、人間に誤解せられて居る。叛臣盜賊の類を鼠賊と稱し、姦臣佞豎の徒を城鼠社狐と稱し、番頭でわるいことすれば、白鼠と云はれ、盜食する人は、頭の黒い鼠など云はれて、わが輩は、わるい事ばかりに引きあひに出されるが、志かし我輩の鳴く聲を聞いて見給へ。忠々と云つて居るではないか。猫は元來魔物だ。恩を知らぬ奴だ。釋迦の死んだ時、あらゆる動物が弔ひにいつたが、猫だけは、いかなかつたと云はれて居る。十二支の中にも入つて居らぬ。そこになると、我輩は、たいしたものだ。十二支の第一におしたてられて居る。子の歳に生れたものは、吝嗇だと、天源術に説いてあるが、その代りに正直だ。藏の番人をさせても大丈夫であるさうだ。

猫が恩を知らぬ證據は、夏目の祿を食んで居ながら、主人の事をすつば抜いて、世間に云

ひふらした失禮な奴である。我輩は別に夏目の祿を食んだわけではないが、その食ひあましのジャミを食つたりして、大分世話になつた事もある。忠々といふ鳴聲に對しても、我輩は不忠な事は言はぬ。猫のやうにすつば抜くとはせぬ。たゞ一つ言つておきたいのは、猫の在世の頃は、来る人が、いつも變人、奇人ばかりで、至極單調であつて、従つて、猫の觀察も一方にのみ偏して居つたが、猫が死んでから、色々な人がほつ／＼入り込むやうになつた。政治家も来る、商人も来る、ハイカラも来る、蟹カラも来る。茶ばかり飲んで、くすぶつて居ずに、酒客も来るやうになつた。

猫が死んでから間もなく、夜になつて、一人の客が來た。鬼の來ぬ間の洗濯、猫の死んだ間が我輩の世界、我輩も一つ猫の眞似して觀察しやうと思つたが、かなしい事には、猫のやうに、人間のそばへ行くことは出來ない。そばどころでは無い、人間の目の届く處へ行けな

い。然れども、我輩には、利器がある。わが輩の齒といふものは、銳利なものだ。その齒を利用して、天井の處々に穴をあけた。そこから下を見下すことが出来るが、人間といふ者は案外に馬鹿なもので、眼があつても、此穴を見るまでの眼力は無い。我等が、いたづらに、この穴へ小便でもすれば、始めて氣がつくであらうが、我輩は、そんな人を苦しめるやうな悪戯は志ない。

客は、軍人である。肩章に、線が二つあるからは、佐官だ。然し星は一つ、而かも、一體に新しいのは、このごろ、漸く少佐にのほつたらしい。戦争がなかつたら、やつぱり大尉でくすぶる人であらうにと、氣の毒に思つて見て居たが、客は、大に得意らしい顔付をして居る。酒が出る、飲む、聲が高くなる、氣焰を吐きはじめる。主人がこまつた顔付をして居るに頓著せず、尻をすゑて、かへる様子もない。「君の名は、だいふ世間にひろまつて居るが、

文學者が何だ。小説が何だ。日本が露國に勝つたのは、憚りながら我輩軍人の力だ。男子、生死の地を踏んでこなけりや、駄目だ。共に語るに足らぬ。酒もろくに飲めないやうぢや、猶駄目だ。まあく注いでくれ給へ」と、杯へうけてぐつと飲む。こんな事に怒るやうな、度量のせまい主人では無い。にや／＼笑つて、「もつと戦争中の功名談を志給へ」と、頓著しなもので、客は少し拍子がぬけたやうだ。「は、あ、功名談、口で言はなくても、胸の勳章が物語つて居る。凡そ古今東西、戦争は多かつたが、旅順攻撃ほど、猛烈な、勇壯な戦争は、他にはあるまい。敵の堡壘へとりついたは、よかつたが、上には銃剣をならべて待つて居る。出て歸らうとすれば、すぐ、丸でうたれる。二晝夜何も食はずに、堡壘の窪みに直立して居つた事もあつた。敵壘へ乗り込んだ處が、敵はまだ塹中に居る。そこへ入り込んで、どちらも剣もつたまゝで、どうする事も出来ず、まつくらの晩であつたが、空で破裂する砲彈の光

りで、敵味方一所に塹中に、おしあひ、へしあつて居るのが、わかることもあつた。とても君等が室内で想像したからつて、わかるものぢや無い」と、頻りに、えらがつて居る。日本の軍人はえらいが、こんな空威張をする軍人中の屑もあるかと、情けなくなつて、其顔をつく／＼見るに、膽力のありさうな顔ではない。先づ其齒が馬のやうに長いのが、臆病者の志るしだ。こいつ、ひとつおどかして、空威張りする鼻をくじいてやらうかと、思ひ切つて、縁側の戸を、盜賊でもこちあけるやうに、動かして見た。さて、どんな顔をするかと覗いて見ると、酔つてるから、顔は青くはならなかつたが、泥棒だ／＼と聲をふるはして、あわてて、側のサーベルをつかんで、縁側にかけ出さうとした。なに君、あれは鼠だよと、主人にいはれて、はゝあと、作りわらひして、畜生、人を驚かせやがると下司な言語を、覺えず吐くと、戦争ぢや、もつと吃驚した事があるだらうねと、微笑した主人も、人が悪くなつた。

押入の中から行李を出す、蒲團を出す、簞笥を出す。散らばつて居る本を箱に入れる。花瓶をもち出す、額をはづす。主人も、細君も、書生も、子供も、女中もどたくくばたく、一家中が、顛覆るやうな騒動をして、さて、其跡は、人も居ない、道具もない、猫の死んだ水甕もない。はよあ轉居したんだナ。人が居なければ、食物もない。食物がなければ、我輩も餓死せねばならぬ。どうしたものかと考へて居ると、翌る日になつて、人が来た、道具が来た。まづく我輩の命はつなける。さて、こんどの主人は、どんな人かと、例の天井の穴から見下すと、いやはや、思ひがけもない、いつぞや、我輩が駭かしてやつた軍人である。ある夜の事である。十二時近くなつて、主人が酒氣を帯びて、歸つて来た。座敷へ通つて帽子をぬぐ、軍刀をはづす、軍服を脱いで、平服に着かへて、火鉢の前へあぐらかいたが、

それから、どうするかと見て居ると、酒だくと、大きな聲で怒鳴つた。「そんな大きな聲をなされると、子供が起きますよ。酒はちきに、お梅がもつて来ますが、あなた大變な事が出来ました」と、細君の高聲。この聲の方が子供の眠を驚かしさうだ。「お前の大變も、知れたものだ。餅を鼠にかじられたぐらゐなものだらう」と、口では冷かして見たが、心では、氣にして居るらしい。「そんな、じやうだんどころぢや有りません。すつかり泥棒に取られて仕舞ひましたぢやありませんが」。留守の役目をよそにして、ぐうぐう居眠して居る間に、泥棒がはいったんだらう。けしからぬ細君だ。こりや、そんな事で、細君の役がすむか。「いゝえ、あなた、内へはいったんぢや有りません」。『そんなら、安心だ。盗まれたのは、盗まれる者が馬鹿だ。盗まれたつて仕方が無い。こつちの知つたことぢやない』。「處が大變です。吉村さんへ、はいったんですよ」。『それはく少々氣の毒だな』。「氣の毒處ぢやありません。私

のものまで、すっかり取られたぢやありませんか。『それも少々お氣の毒の事だが、然し自業自得といふものだ』と、云つて居る處へ、下女が御膳もつて来て、置くと其まゝ立ち去つた。御膳の上には爛徳利が一つある。猪口が一つある。箸が二つある。らつきやうが一皿ある。煮肴が一皿ある。その煮肴の食ひあますが、やがて我輩の食料になるかと、喉をならして、のぞいて居ると、『今晚は、例の通り、おかへりがおそいだらうと思つて、何もこしらへて置きませんでしたよ。それに、そんなに酔つて居らっしゃるから、どうぞ、一本だけでよして下さい』と言つただけで、酌を志やうとも志さない。『その御忠告をうけるか、うけないか知らぬが、お酌は志してくれてもよからう』と、猪口を出す。細君は何とも言はずにお酌をする。『まあ何んで、のんきな方なんだらう。私は、はだかになつたんですよ。どこへも行けないぢやありませんか』。主人は、一口のんで、『支那ぢや婦人を外出させないやうに、足を小さくして

あるが、それから思やア、お前の方が、よつほど仕合せだ。一體、夫と著物と、どちらが大事だと思つて居るんだ。夫がこまつた時にやア、著物でも、賣りとばすがいやなら、五二館へでも出品して、急を救ふのが、妻の道ではないか。然るに、お前は、夫の歎願を鼻であしらつて、いくらでも借金なされ。衣服は女の寶、手はつけさせませぬ。うちへ置いたら、いつ差押へが来るかも知れぬと云つて、吉村さんへ預けた罰は觀面、それ、その通りに、盗まれたぢやないか。自業自得といふのは、そこだ。おれの知つたことぢやない。『そりや私も妻ですもの、あなたが、まじめにして居らっしゃれば、著物もほしくはありませんが、うちを外にして居らっしゃるから、私は、やるせがありませんわ。一體今晚は、どこへいらしたんですか』と威勢よく切り込んだ。『今晚は、聯隊長殿の處へいつたんだが、どこへ行かうが、おれの勝手だ。貴様は、一體妻の役目といふものを知つて居るか。夫は、つきあひがあるか

ら、内もあける。その内を守るのが、妻の道だぞ。ぐすく云ふな。『私は、ぐすく言ひたくはありませんが、あなたが言はせるんです。お酒ばかりあがつて、酒代ばかりでも、著物がいくらも買へます。内であがるなら、まだしも、毎晩のやうに、おそくおかへりになつて、金はよそで遣つて仕舞つて、借金がふえるばかり、やる瀬がないぢや有りませんか。よその方を御覽あそばせ。戦争からおかへりになつて、家を新築なさる方が多いぢやありませんか。借家をして、その上に、借金をして、年金があつても、高利貸にとられて、一文も金は手にはいらぬやうな處は、うちばかりですよ。子供が三人もあります。ちつとは、經濟の事も考へて下さい。』貴様の經濟がへただから、こんな、いつも困るのだ。よその軍人が家を建てるくと、口ぐせのやうに言ふが、その家をたてるのは、みな細君の經濟がうまいからだ。貴様も、氣を利かして、おれの出征中に、經濟をうまくやつたら、とツくに、家

は建つて居る筈だ。『私がうまく經濟を志しましたから、お留守中に、古い借金は、おほかたかたが付いたんですよ。私でも古い借金さへ無けりや、おかへりまでにやア、ちやんと、立派に家をたて置きませんが、借金の無いよそ様とは、一所にするわけにはゆきません。主人の陣が、くづれかゝつた。されど、白旗はたてない。』自分で、うまいつもりで居るから、をかしい。本當にうまけりや、もつと借金のかたが付いて居る筈だ』と、後殿の兵が、もりかへして來た。夫婦喧嘩は犬も喰はぬと云ふが、我輩のやうな鼠でも、喰ふのはいやだ。

日露戦争の結果は、米國大統領の仲裁で、ボーツマスの講和談判となつたが、この戦争の結果は、どうなることかと、ひそかに天井の上で心配はしたが、我輩の出る幕ではない。『おぎやア、鄰室で子供が泣き出した。』おぎやア、くく、細君は、止むを得ず、軍を收めて、鄰室に入った。成る程、子は夫婦のかすがひ、愛の失せた夫婦も、子故に、つながつて居る例

は、世間に多いことである。この場合では、唯一聲の「おぎあア」が、大統領の仲裁の働を志たのである。

主人の顔色は、なほ、おだやかでは無い。頻りに、ひとりてついで、ぐびぐび飲む。らつきやうをかじる。煮肴を喰ふ。横になる。手枕をする。終に軀をかき出した。

細君は、再び軍勢をととのへて来た。このさまを見て、あなたくと、ゆり起したが、起きない。『いつのまに、およつたんだらう。おかせをめさねば、よいが』と、獨言いひながら、蒲團を取り出して、ねかせた。蒲團の下へ、刀をいれた。これは、泥棒の用心であらう。例になつて居るので、命令なくとも、細君は、例の通りにした。いくら喧嘩をしても、夫婦は夫婦だ。感心なものだ。

細君は起つて、御膳を臺所へ運んだ。うれしや、食ひあましの煮肴は、我輩の口にいることかと、臺所の天井へまはつて、見下すと、細君は、片身の残つた處をつまんで、口へ頬張つた。らつきやうも、一つつまんで口へ入れた。そして膳のものは、みな鼠入らずへ入れて志まつた。やれ／＼今夜は、食にありつけぬ。いま／＼しいから、天井をどん／＼ふみ鳴らした。また、子供の泣聲が聞える。表座敷の天井へ来て、見下すと、ランプの光が幽かになつて、主人がひとりて寝て居る。ちと、人がわるいかも知れぬが、この主人の顔の棚おろしをして見やう。先づ、みつともないのは、口をあいて寝て居ることである。我輩は、神相全編といふ書物を、天井へ、引張つて来て、読みかじつた事があるから、少しは、人相の事も知つて居る。目は、智をあらはし、鼻は感情品性をあらはし、口は意志をあらはすものである。意志の志つかりしたものは、口が志まつて居るが、意氣地ないものは、口がだらりとして居る。呼吸は鼻ですべきものであつて、口ですべきものでないとは、生理學の一冊も読み

かじつたものは知つて居るであらう。然るに、日本人は、一體に口の志まりが悪くて、平生口をあけて居るものが多い。寝ると、なほ更口をあけるものが多い。そんな人は、氣力が弱いのみならず、身體も弱い。鼻下の長いのは、長命の相だといふが、鼻下が長ければ、自然に口がふさがる。口がふさがつて、鼻で呼吸する人は、必らず長命する。嬰兒でも、口をぶつて寝るなら、丈夫にそだつ子である。長命は、鼻下の長短にのみはよらずして、口で呼吸すると否とにあると言つても、よいくらである。酒に酔うて寝ると、呼吸がくるしくなつて、口をあけやすいものであるが、この人は、平生でも、口がゆるんで居る。到底、大事を共にするに足らざる人である。この人の顔の棚下しは、これだけで、やめて置かう。

今夜は、馬鹿にさむくて眠られない。蒲團にして居る反古紙が薄いから、今一二枚、蒲團を徵發しにゆかうかと思つて居ると、がたぐたと、雨戸をこじあける音が、深夜の寂寞を破

つて聞える。これは、本當の泥棒が、はいつたに相違ない。主人を起してやらうと思つて、どんぐり天井の板を踏みならすと、主人は、やうやく目をひらいた。蒲團の下から刀をとり出して、身にひきよせたのは、泥棒の入つたことを知つての用心だらう。我輩の注進が功を奏したかと、ひそかに喜んだ。賊は首尾よく雨戸をあけ、障子をあけて、座敷に入つたが、主人は起きない。賊は枕もとの財布をとる。主人は起きない。賊はまた銀時計をとる。主人はなほ起きない。此二品をとつて、ふすまを明けて、次の室へはいつた。主人は起き上つた。刀を抜いた。足はぶるぶるふるへて居る。その刀をもつ手もふるへて居る。ふるへながら、賊のあとをつけて次の室に入つた。さあ面白い。いくら臆病でも軍人だ。刀をもつて居る。賊の命は、あの白刃の露と消えることかと思つて居ると、主人は何とも言はず、切りつけた。それと共に、「きやつ」と、たまぎるのは、賊の聲では無くて、女の聲であつた。「大變だ。大

變だ。書生も起きてくる。下女も起きて来る。子供もみな起きて泣き出す。ランプをもつて来る。あはれや細君は肩先を切られて、倒れてゐる。「醫者へく」。書生は、かけ出す。醫者が来る。創は、ごく軽くて、たつた一針ぬつて事がすんだ。命は、大丈夫である。賊は、どうしてにけたやら、我輩も、そこまでは、目がとどかなかつた。

下

悪譚、識を成すといふことがあるが、何も我輩は、盗賊が入る前徴に、盗賊の入つた眞似をして、驚かしたのでは無かつた。臆病の癖に、あまり威張つた事をいふから、ほんの、懲らしめの爲めに威かして見ただけの事である。然るに、思つたよりは臆病であつたには、却つて我輩の方が驚いた。鼠の音がするのを盗賊とまちがへて、あわてよ、刀を執つて飛び出さうとする。さうかと思へば、本當に盗賊が入ると、小さくなつて、みすく金をとられる。

漸く刀を抜くかと思へば、あわてよ、間違へて、盗賊は斬らずに、細君を斬る。いやはや驚き入つた人だ。夏目の猫が生きて居つたら、昨夜の光景も、面白く寫生文にするだらうが、我輩のやうな鼠では、とても細かな描寫は出来ぬ。細かく注意して描寫するよりも、放言する方が、我輩の好む所である。

もとの主人が慙しくなつた。去らむ哉、く。こんな處に居つては、ろくな事は、見も聞きもしない。自然、悪口が言ひたくなる。こんな人の悪口言つたつて、さつぱり張合ひが無い。殊に長く居つては、自然に祿を食む次第になるが、祿を食んで居りながら、悪口言つては、我輩の鳴き聲に對しても濟まぬ次第である。今夜限り、この家を立ち去ることにしやう。それまでは、まだ時間があるから、十枚ぐらゐるは、ゆつくり書ける。ふと、天井の穴から見下すと、主人は志よけた風をして、坐つて居る。昨夜の騒の爲めに、今日は缺勤したものと

見える。折々、憎い奴だ〜といふ聲が聞える。はよア、自分の間が抜けた事は、棚にあけて、盗賊を憎んで居るらしい。未練な男である。紙を取り出して、何やら書いた。よく見れば、盗難届である。手をうつ。書生が来る。「これを警察へ出して呉れ」。書生はうけ取つて、「奥様のお怪我の事まで知れまするから、届けずに置かれては、如何でせう」。『いや〜、規則だから、届けなければならん。それに、届けておいたら、金は戻らなくても、時計は戻るかも知れん』。下司ばつた人だ。「憎い奴だ」と、また獨言のやうに言ふ。「あかし、お怪我は輕うて、仕合せでした」。書生の方は、盗賊よりも、取られた金や時計よりも、細君の怪我の方が重大問題であるらしいが、主人の方は、さうでなく、金が惜しい。時計が惜しい。盗んだ奴が憎いと見える。細君よりも時計が大事と見える。見さけ果てた人だ。「そんなら、往つてまゐります」。書生は氣の進まぬ風で立ち去つた。その跡で、なほ、「憎い奴だ、〜」。

おい〜、君、何が憎いのだ。苟くも、日本帝國の軍人でありながら、刀まで用意して居りながら、みす〜物をとられ、おまけに、あわてよ、盗賊と思つて、細君を斬るやうな君自身が、軍人として憎むべきものであるぞ。臆病は、君の生れつきだ。何も、君の臆病が憎いといふわけでは無い。まさかの時に、軍人の任務を果すことが出来ないのが、憎むべきである。然るに、君は、自から憎むことはせずして、盗賊ばかりを、憎んで居るが、その根性が、にくらしい。否、不便だ。古來、女子と小人とは、養ひ難しと言つて居るが、君の如きは、その養ひ難き小人である。君のやうに、むやみに人を憎んだり、怨んだりするのが、即ち小人の特性である。女子の特性である、養ひ難き所以である。君には、とても、大人君子の心は、わかるまいが、そりやア、君、ひろいものだ。高山にのほつて、天下を見下して居るやうなものだ。癪にさはる、怒る、憎む、怨むなどといふことは、これ人と取つ組合をす

るのであつて、まだ山にのほつて居ない。おのれを離れて居ない。大人君子になると、己れを離れる。山にのほつた心持である。人と取つ組合ひをしない。人の美を見ては、うらやましく思ひ、ねたましく思ひ、人の醜を見ては、にくらしく思ひ、一朝我身に不利をうけては、忽ち怒り、怨むのが、塵の巻をうろつく心持で、即ち小人根性といふものであるが、大人君子になると、ちがつたものだ。人の美を見ては喜び、人の醜を見ては、救つてやりたくなり、心は明鏡の如く、すこしも、自我の雲に掩はれないから、自分の事でも、悪いことは、悪いこととはつきり分り切り、人の事でも、善いことは善いことと、はつきり分る。不利をうけても、自から憎んで、他を憎まない。左の頬をうたれたら、右の頬をもうたせる。この心持ちになれば、聖人であるが、世俗から見れば、宗教家くさくなる。君等軍人は、こよまでに到らずともよい。人を憎んでもよい。が、その代り、憎むだけの、世俗相當の理由を有して、

人並以上の勇を振ひ、智を振ふだけの力がなくてはならぬ。それなら、軍人として、まづ立派なものだ。

自から高ぶるのは、まだ本當に高くないのである。稠衆の中で、高い足駄をはいて、爪立て、頭をのぼして居るやうなものだ。高山にのほると、何も爪立つ必要は無い。寐轉んで居ても、らくに、天下が見下される。大人君子の心持は、即ちこれだ。世俗から見れば、形は馬鹿にせられて居るやうであるかも知れぬが、親が小兒に、小便ばかりかけられても、その小兒を怨む親はあるまい。この子をいつくしむ親の心がわかるなら、大人君子の心も、わかるべき筈である。親が小兒に、小便ばかりかけられたが如くに、大人君子は、世俗に小便ばかりかけられることがある。その外形を見て、世俗は、馬鹿にせられると思ふだらうが、大人君子の心では、世俗を憐んで居るのである。又大人君子は、心が高くて、山の上に登つて居る

やうであるから、世には、その形をひがんで取つて、人を馬鹿にして居ると思ふかも知れぬが、いや／＼人を馬鹿にして居るのでは無い。自から馬鹿になつて居るのである。老子が和光同塵といつたのは、此事である。大分長く説法した。分つたか君、ドン／＼／＼。我輩の言葉はわからなくても、この我輩の足音は、聞えるだらう。

そちこちして居るうちに、日がくれた。穴から見下すと、主人は、ちびり／＼、飲み始めて居る。酒がまはるにつれて、晝間の様子とは、がらりとかはつて、元氣になつた。やれやれ、あはれな人だ。説法ついでに、今一つ説法して聞かせやう。酒をのむと、すぐ氣が變はる。くよく／＼思つて居たことも、何處へやら。急に陽氣になり、元氣になり、うかれ出し、氣焔を吐きだし、平生のおとなしい假面、忽ちとれて、傍若無人になり、騒ぐ、あばれる、不平をもらす、喧嘩をふきかける、人の祕密をもらす。洵に酒は憂の玉箒、本人は、それで

満足であるかも知れぬが、實に困つたものだ。このやうな人は、酒を飲むのでなくて、酒に呑まれるのだ。酒の席で、替間の代りにするには、よいが、とても、大事を共にすることは出来ぬ人である。酒の眞の趣とは、そのやうなものではない。眞に酒の趣を解する人は、平生でも酒をのんだ心持で居る。酒をのんだからとて、別に心持がかはるものではない。酒をのんだ心持とは、自から馬鹿になつて居ることである。前にも云つた、老子の和光同塵である。物質的に、酒を味はふのは、まだ／＼酒の修行の足りない人である。とても、この趣は、君には、わかるまいが、分つても分らなくても、かまはない。言ひたいこと、言つて仕舞つて、もう用は無い。おさらば、さらば。

小 犬

學校は卒業したれど、未だ定まれる職業を得ず。暮夜先輩の門を叩いて憐を乞はむには、我志あまりに頑なりき。俗に媚び先輩に攀援せざれば、今の世に衣食の資を得難きことは、もとより知らざるにあらざれども、われは終に我情を枉ぐる事能はず。妻まである身の、いつまでも人の家に寄寓すべくもあらねば、小石川のかたほとり、棟割長屋の二間ある家ばかりぬ。わづかに數金にて、飲食するに差支なき迄の道具を買ひ、夫婦に赤子一人が喰ふか喰はぬかばかりの瘦世帯、われ妻の爲めに水汲めば、妻は我が爲めに赤子脊負ひながら米をとぐ、世にも果敢なき住まひなり。

ふと耳たつれば、臺所のあけ板の下にて犬の子の泣く聲す。その揚板はづして見れば、無慘や、中には生れて十四五日たてるかと覺しき犬の兒二匹あり。その一匹は既に死して冷かになり居り、今一匹は瘦せたれど息はなほたしかなり。可憐なる犬の兒よ。余の前にこよに

住まひし人は、汝等を置き去りにしたる也。汝等は、薄情なる主人に見棄てられたる也。われは狷介、みづから好みて世に棄てらる。これ自ら期する所なれば、つゆ世を恨まざれど、汝等は罪なくして、主人に見棄てらる。汝等もし心あらば、如何にか恨むならむ。さは云へこのやうなるいぶせき家に住ひし主人なれば、必ずや貧しかるべく、汝等を疎にせむ心はなかるべけれど、生計上止むを得ず、汝等を見棄てしものならむ。死せるものは詮方なしとて、土ほりてうづめ葬り、生けるものはたすけむとて、少しばかり飯與ふれば、尾をふりて、いと喜ぶさまなり。

いつまでも我家に育てたけれど、われも世に棄てられたる小犬なり。親子三人の命をつながむことだに覺束なき今の身の上、汝を養はむほどの資力だに無きぞ悲しき。されど、世の中には金もてる人多し。汝をよき家に送りやらむとて、小犬を懐きて、丁字路頭に立ちぬ。

木の葉はらくとこほれて、風の身に去む秋の夕なり。ゆきかふ人おほしとはあらねど、また少なからず。その人毎に小犬の來歴を説きて、養ひ取らむことをすよめたれど、いづれも氣の毒とのみ言ひて、もち行かむとするものなし。かくて、日は暮れむとす。また明日こそとて、われは家にかへらむとしけるに、二重外套きたる老紳士來りければ、むだとは思ひながら、話しかけよるに、案外にも喜べるさまにて、われもち行きて養はむとて、小犬を懐にして立ちさりぬ。察するに、富める人なるべし。而して憐れなる我が小犬は、此富人に拾はれて、寢に小屋あり、食に肉あり、楽しく心よけに生ひたちしならむか。

われは、いつまでたちても窮措大なり。終に都に住みかねて、山陰のはてまでもさすらひ行きしが、そこも思ひしまよの山里にはあらず、またも都にかへり來りぬ。ある日もと住ひしあたりまでそごろ歩きして、ふと思ひ出さるゝは、犬の事なり。今は如何にか生ひ立てるならむと思ひつゞけて、なほ進みのきしに、いと立派なる門口より、一匹の犬いで來りて我を吠ゆ。大さは見違ふ程なれども、見覺えある毛の色にもあらく、まがふ方なき昔の小犬なり。犬なれば、昔の恩人とは知らざるべし。恩を賣るのさもしきことは、言ふまでもなければ、昔の大恩をわすれ、甚しきは、其恩人を陥擠して顧みざる今までの友どち、はた犬にも劣れりと云ふべくや。

余の無妻主義

余はもと無妻主義を有したりき。わが父肺病にて死せり。我母我家をたて、たゞ一粒種我身を、柱とも、杖とも頼みて、苦辛に苦辛を重ね、漸く貧乏世帯を維持し來りしが、余が中學を卒業したる年、父と同じく肺病にて死せり。既に父母に死に別れて、兄弟もなき孤兒

の身、もしや親の病を遺傳し、もしくは傳染して、亦同じく肺病に死することもあらむとは、余が平生神經をなやます所、夜中寂寥に堪へざる時、人はこれをも戀とやいはむ。理想の美人を胸に描き、愚にもつかぬ未來の家庭を想像するとなきにあらざりしも、いや／＼、われ若し肺病にて死せば、我が妻に憂き目見せむと、なほわが父の亡後に於ける我母の如くならむ。一生、獨身にて暮さむこそ心安けれ。これ一也。

余が性、不縦不羈、殊に冒險を好めり。ゆく所にゆき、止まる所にとどまり、興來れば、千金を一宵に散じたく、錢つくれば、一室に蟄居して晏如たり。面白しと思へば、夜を徹して書を読むこともあり、酒を飲むこともあり、旅行することもあり。かくて五十年の命を三十年に縮むとも、思ひ放題な事して死せば、つゆ悔ゆる所なし。世の中は、太くみじかく、面白く暮さむこそよけれ。さは云へ、情にはもろき男、もし妻あり子あらむには、ほだしと

なりて、わが本性を枉げざるを得ず。これ二也。

余は讀書文章以外に藝能なし。浮世に身を立てむには、文を賣らざるを得ず。これも獨身ならば、費用少くして、従つて多く文を賣るを要せざれども、係累多くなれば、費用多くなり、従つてまた多く文を賣るの必要を生ず。かよれば、如何に文人として純潔ならむとするも、竟に文章を細工する職人たるを免れざらむ。これ三也。

余は以上の三理由よりして、無妻主義を有したりしが、おぞや、妻らざるを得ざりき。われ高等學校を卒業して、大學校に學びける時、駒込のかたほとりに下宿しけるが、そこに一人の娘あり。年十七八、一目ぞつとするばかりの美人也。されど君、余は今の世の小説にありふれたるが如く、ひと目美人を見て、直に戀るよまでに、意志薄弱なる者には非ず。間數はわづかに四間か五つ間にて、そぎ賣きの極めて粗末なる建築、余はたゞその下宿料

の安きを喜びて下宿しけるが、かゝる粗末なる下宿屋に、かゝる絶世の美人あらむとは思ひかけざりき。わが禿筆は、到底其美を形容すること能はず。君よ、美と云ひ、艶と云ふも、美人をつくせるものに非ず。強ひて形容すれば、光ると云はむか。然り、光る也、かがやく也。むさくろしき陋屋の下宿も、ただこの美人あるが爲めに、光りかがやけり。

われはじめは、唯其美に打たるより外には、何等の念もなかりしが、ふと思ひかへして却つて氣味悪く感ぜり。普通の下宿屋にあらずして、一種の魔窟にあらずやとまで疑へり。されど余はまた思ひかへしぬ。如何なる魔窟にもせよ、わが心だに慥かならむには、毫も苦慮するを要せざる也。

父は風疾とて、打臥す。年五十餘、律義らしき顔付也。母は五十歳には足らざらむ。苦勞にふけて見ゆれど、目口そろへる顔付、娘にくらべて、まんざら鳶が鷹を生みたりとも思は

れず。これもちやほやお世辭言はざるに、却つて誠實なる心見えて、つゆいやらしき所なし。娘はかゝる貧しき下宿屋に似氣なく、おとなしく、やさしく、上品にして、而かも寂しからず。えも言はれぬ愛嬌ありて、之にうち向へば、いつも春風の吹く心地するに、われも居心よく、珍味なき食饌も、この美人の運び來れるものと思へば、何となく快く味はれぬ。君ようちあけたる話なるが、これ人情ならずや。余はたゞ美人を美と思ひしのみ。戀しとは思はざりし也。

余が下宿しける時は、四五の同宿人ありしが、半月ばかりたつ程に、皆一時に立ち去りて余一人となりぬ。なほ大風の俄になぎたるが如し。何となく心細く感じぬ。何故にかく揃ひも揃うて、みな申し合せたるが如く、一時に立ちさりしぞと主婦に問へば、ほとと打笑ひ、これにはわけこそ有れ。御詞の如く、申し合せて立ち去りたる也。來りし時にも申し合せて

來りし也。最も年とりて、口髯あるが、壯士の親分にて、他の人はその子分の壯士とやら。金づかひも綺麗にて、時々的心付もありて、よきお客様と大事に扱ふほどに、思ひきや、娘をくれぬかとの御相談。さてはこの下心ありての志うちかと思へば、そら恐しく、その志をあだに思ふとはあらねど、壯士と聞けば、何となう、鬼に取らるゝ心地して、體裁よく斷れば、その日、皆一同立ち去られぬ。意趣がへしに、我家をこまらせむおつもりにや。かく一時に立ち去られて、困らぬにはあらねど、娘の身にはかへられずといふ。壯士のみが客に非ず。やがて素性の正しき學生來らむと慰めてやりけるが、四五日たてども、新に下宿するものはあらざりき。

かよりし程に、或日一家俄にうちしめりたる様子なり。娘の泣聲も聞えぬ。母親の泣聲も聞えぬ。いぶかしく思ふまよに、夕食の膳置きて去らむとする主婦に向ひて、志ばし待たれよ。御家の様子たどならず。うち明けて差支なき事ならば、伺ひたし。よそながら心配に堪へずと云へば、うれしくも問はせ給ふもの哉。そのおやさしき御言葉にあまえて、何事もうちあけ申さむ。御存じのあの壯士の親分、志ふねくも我家にたより申す也。この頃、媒介口ありて、先方は高等官、下女二人に書生の三人もありて、舅も姑もなし。抱へ車ありて、世に時めく御方といふに、此上もなき良縁と、ふわと乗りしは、取かへしのつかぬ一生の大失策、うれしさの餘りに、精しくは詮索もせず、つまりは娘がかはいよからの慾心づく、結納にもらひし五十圓にて、娘の著物を拵へたり。さしせまりたる借金をかへしたり。幾んどみなつかひ果したる後、よくく聞けば、高等官とは、とつてもつかぬ虚言、例の壯士の親分が手をかへての狂言、一同たどぎよつとして、涙の外にはよき思案も出でず。漸く媒介人にたのみて、破談を申込みたるに、さらば五十圓の結納金を三日以内に返せ。縁談を取消さ

むには、金なしと見て取りたる上の言ひまへ、五十圓をその面にうちつけてやらむものとは思へど、さてその五十圓が出来ず。御存じの如き貧乏人、親爺は長の病氣、動くことも出来ず。われら女の力にては思ひもよらず。他に相談すべき親類もなし。なさけなや、うまくとだまされて、娘は終に鬼の餌となりけるなりとて、うち泣く。

當時われは修行中の身也。下らぬ人情にかよづらひて、よその疝氣を頭痛にやむこの大に損なるを知らざるに非ず。されど、わが本性の、情にもろきを如何にせむ。僅々五十圓の金にて、人の娘の自由が束縛せらるよかと思へば、情けなくもあり、馬鹿々々しくもあり、腹だよしくもあり、又何となく残念にもあり、如何にもして五十金をこしらへて、この家の急を救はむと決心せり。君よ、人情といふものは可笑しきもの也。この娘もし醜婦ならば、又氣にくはぬ女ならば、如何に情にもろき我身とても、本氣になりて、五十圓を無理に算段

せむとはせざるべきも、この絶世の美人を、むざむざ壯士輩の手に委ぬるは、何となく惜しく思はれし也。さればとて、わが身がこの美人を得て、どうせうといふ野心は微塵もあらず。二日二夜少しも眠らず、机に對ひて筆を走らせて、百枚餘りの翻譯をなし、それにて五十圓を得て、之を主婦の手にわたすや、否や、直に蒲團かぶりて、昏々として眠れり。余の眠のさめし時は、破談全くとのひて、一家愁眉をひらきし時なりき。父親は、おかけ様にて病氣もよくなりぬとて、床を出で禮に來りぬ。母親はうるさきまで頭をさけて喜びぬ。娘が笑顔日頃にもまして、夕立の空さりけなく澄める明月も昏ならず。われは俄に一家の恩人ともてはやされける也。されど、われは僅々五十圓の金を恩にきするが如きさもしき心あるものには非ず。余はたどいやがる絶世の美人を、むざくと壯士が手活の花と眺むるを惜しみのみ。支那幾多の詩人が明妃の曲を作りしも、恐らくは、この情に外ならざりしならむ。

あなた様のやうな深切なの方が娘を貰つて下さらばと、主婦覺えず知らず口走りしを、余は却つて腹だしく思ひき。余はそのやうに、やすつほき男にはあらざるなり。

ある夕、余はひとり道灌山頭に散歩せり。十二月のはじめ也。落葉して、鹿角のむらがるが如き木立、斜陽を帯び、幾羽の鳴鴉を點じて、冬のあはれをつくしたるかと思へば、滿地の麥苗、はや寸を拙きて生氣の躍動するに、天地の變遷のいと面白きを覺えて、餘念なく佇立しけるに、男五六人、俄に余の身にむらがり來りぬ。女を奪ひ取りたる恨、思ひ知れと言ふより早く、一拳先づ余の頭に下りぬ。ふりかへれば、例の壯士の連中也。余も少しは柔術を心得居れば、二三人をなげとばしたれど、一人に多數、終に敵する能はず。ねぢ倒されて下駄にて蹴らるゝやら、杖にてたよかるゝやら、言語に絶えたる亂暴狼藉、もはや、もがむ力もつきて、このまゝ叩き殺さるゝとかと覺悟せしが、運よくも通り來かゝる人ありて、

それに驚きて、壯士等は、みなにけゆきたれば、漸く余の難は解けぬ。鮮血、面をおほひ、四股の痛さ、言はむ方なく、一步も動くこと能はず。車にのせられて、辛うじて下宿に歸り來り、これより後、數週間は病聲に臥せざるを得ざる身となりぬ。

主婦と娘とが本心からの看病、かはるゝ徹夜までして、療治に力をつくしくれて、五週間の後に全治せり。されど、醫師の療治拙なりしにや、右の腕きかざるやうになり、筆とることも出來ず。臂を折りし塞翁の子の昔おもひ出されて、これも運也。またよき運もやまはり來むと心にはあきらめたれど、實際の處、不便なることは言はむ方なし。母も娘も、禮言ふやら、謝罪るやら、たゞ氣の毒がるに、われは却つて氣の毒なる思ひをなしたりき。

おのろけと言ひけし給ふか。君よ、詩人小説家のものする所、半以上は總ておのろけ也。余は詩人や小説家の如く婉曲におのろけを言ふ能はず。つゆちり飾りのなき處を思ひくみ給

へや。さても、その後、例の美人、それとなく我れに意中をほのめかしけるが、われは平生の無妻主義をもち出して、これを拒みぬ。ふつとかなるこの身、もとより御身の妻とならむと願ふにはあらず。たゞ御身の腕とならむとこそ思ひはべれ。わが爲めに、三夜徹夜して筆執り給ひたるだに、一生忘れ得ざる厚恩なるに、また我が爲めに片腕を廢物にし給へり。文章にすぐれ給へる御身、如何ばかりか不自由を感じ給はむ。われ筆はみよす書きなれど、原稿の代筆ならば、ほど事足りぬべくや。わが一生の御願なり。妻とはおほさず、腕とおほして、御側におかせ給へや。この願かなはずば、生きて甲斐なし。如何はせむとてふし沈めり。嗚呼君、われなほ之を斥けて、平生の無妻主義を實行するが男子なる乎。かゝる戀愛をも冷かに見て、固く身を持するが浮世の道德なる乎。

君よ、余は世間の毀譽をよそに、この女を腕とし、又妻としたる也。

友は、斯く語り來りて、杯とりあけて、ひと息に飲みほす。君と交はること五年、思ひがけずも、面白き話うけたまはりたるもの哉。さるにても、細君は、今、いづくにかおはすると云へば、憐み給へ。既に八年前、墓の主となりたる也。

樗牛の一生

明治三十五年將に暮れむとして、文星一夜湘南の濱に墮ちぬ。嗚呼ゆかしと思ひし鎌倉の地、樗牛の亡き骸を茶毘するの處ならむとは思ひかけきや。われ鎌倉を訪ひしこと、前後四回、はじめは歴史上の古蹟を親しく看むとて、ひそかに雀躍したりき。以後、雀躍するまでには至らずとも、なほ何となくゆかしと思へり。而して昨日の歡樂一夢に歸して、終に茲に友の葬を送らざるを得ず。

われ君と同じ年に大學に入りたれども、君は第二高等學校よりし、我は第一高等學校よりせり。君は哲學を修め、我は國文を修めたり。入學してより一年餘りは、絶えて相識らず。帝國文學起るに及びて、はじめに相識れり。酒間會て、樗牛醉ひて、戯れに余に謂つて曰く、君は體が弱さう也。必ず早く死せむ。君死なばわれ弔文を作らむと。われ曰く、柳に雪折なし。君こそ却つて早く死にさうなれ。君死なばわれ弔文を草せむと。座に芥舟、醒雪諸子ありき。必ずや記憶せるならむ。爾來わづかに七八年、惡諛、讖をなして、樗牛先づ死せり。嗚呼誰か思はむや、蒲柳の質の我身死せずして、壯健なりし樗牛先づ死せむとは。又思はむや、碌々として、生きて甲斐なき我身の、瓦と全くして、才に、學に、天下の重望を負ひし樗牛の、玉と碎けむとは。

天下知ると知らざると、樗牛の死を聞きて、誰か哀悼せざるものあらむや。然れども眞に哀悼すべきは、死せる今日の樗牛にあらずして、病の爲めに留學を辭せざるを得ざりし當年の樗牛にあり。嗚呼絶代の秀才が、文部省より拔擢せられて、西洋に留學せむとせしは、蛟龍の雲霧を得たるに比するも、必ずしも大袈裟に非ず。然るに二豎無情、この才人を拉し去つて、病床に鎖しぬ。當時樗牛が心中、果して如何なりしぞや。爾來少康なきにあらざりしも、愁雲常に樗牛の身にたなびきしや必せり。而して藝が身を助くる不仕合、病間なほ筆を執つて、天下の讀者に見えざるを得ざりしは、氣保養になりしともありしなるべけれども、時には苦しく思ひしなるべし。病終に重りて、病院の一室をわが天地と限らるゝに至りては、これ傷を負へる猛獅を檻内に押込むるに異ならず。多情多感なる樗牛、豈よく之に堪へむや。一日ながらふれば、一日の苦痛あり。樗牛は、むしろ甘んじて瞑目せしならむ乎。

樗牛、病床に悟脱して、枯木冷灰ならむには、餘りに情あり、餘りに才あり、餘りに活氣

あり。樗牛は、一生何か活動せずには居られざるべし。晩年、ニイチエに私淑して、美的生活びてきせいを唱へしは、思ふに、その眞面目しんめんぼくならむ乎。かばかり勝氣かちきにて才すぐれたる絶代の才人が、空しく病院に呻吟しんげんして、思ふやうに學問がくもんを研究する能はず、事業じげふをなす能はず、本能的性情ほんのうてきせいじやうを逞たくましうする能はざるは、けに此世このよながらの地獄也。悲しからずや。美的生活論びてきせいこつろんは、この才人が、現世げんせの地獄じごくに煩悶はんもんせし叫び聲さけびこゑなりき。

われ社會しゃくわいの爲め、文壇ぶんだんの爲めに、樗牛の死を惜まざるを得ず。然れども、死生しせい、命めいあり。樗牛ちゆうぎうの如く、多く活動くわつどうしたらむには、三十年の生涯しやうがいも短しとはせず。花々はなはなしき哉、樗牛の一生いちじゆう。明治の世、才人さいじん多し。されど、樗牛ちゆうぎうの如く、花々はなはなしきもの、果して幾人いくにんかある。われ等凡人ぼんじんの一生は、牛の重荷おもひを負うて、のそくと歩むが如し。樗牛の一生は、駿馬しゆんばの名人めいじんをのせて走れる也。もしくは電光でんくわうの空そらにきらめける也。

われ大學だいがく以前の樗牛ちゆうぎうを知らず。大學に入りたる後の樗牛は、學生がくせいにあらすして、名士めいしなりき。樗牛が青年時代の才情さいじやうを逞たくましうし、才筆さいひつを揮ひし瀧口入道たきぐちにちだう一篇、名をかくして、讀賣新聞よみうりしんぶん懸賞けんしょうの歴史小説れきしせつせつの選せんに入り、世みなその才筆さいひつに驚きて、作者さくしやの何人なるかを物色ぶつしきして止まざりしが、何ぞ知らむ、これ冷かなる哲學てつがくを研究けんきゆうする高等學校の一學生いちがくせいが筆のすさびならむとは。樗牛ちゆうぎうもしこの方面ほうめんに向つて進みしならむには、優に一代いちだいの小説家せつせつかとなりしなるべけれど、樗牛の才氣さいきあまりありて多能たのうなる、豈に區々くくたる明治の小説家と伍ごを同じうして甘あまするものならむや。

樗牛が大學時代の半なかばにして、帝國文學ていこくぶんがく起り、樗牛椽大てんだいの筆を揮ひて、帝國文學は、幾んど樗牛が獨舞臺ひとりぶたいの觀あり。その四號ごうごう以前の時文じぶんは、幾んどみな樗牛一人の筆也。爾來じらい入りかはり、立ちかはり、二人にて書き、三人にて書き、四人にて書き、五六人にて書くも、竟つひに樗

牛一人の當時に如かず。既にして樗牛は太陽に移りて評論に才筆を揮ひ、評論壇の先輩たる逍遙、鷗外諸氏と對峙して、儼然たる一大強國の觀をなし、逍遙、鷗外、筆を中止するに及びて、天下の評論壇は、終に樗牛一人の舞臺となれり。かく筆を執るの傍、櫻癡、逍遙諸名士と伍して、演劇の改善を圖りしこともありき。而かもなほ學業を怠らず、桑木、姉崎諸氏と共に、秀才多しと稱せられたる明治二十九年卒業の哲學科學生中の優等なりき。何ぞそれ綽々として餘裕あるや。

官立の學校に籍を有せざる一雜誌記者の樗牛が、留學の命に接したるは、實に當時の異數也。病の爲に留學を得ざりしかども、病間筆を呵して論文を草すれば、文學博士の學位は、忽ちその膝に落ちぬ。規則通りに、大學院五年の年限に於て、論文を草して、博士となりたるも、亦異數とすべき也。君が大學に入りてより、死に至るまで、僅に九年半、その終りの

二年半は、病床に悩みしが、實に君は短き年月に於て、花々しく活動せり。伊藤侯や大隈伯が、三四十年かよりて政治界に贏ち得たる重望を、君は僅々數年間に、文壇に贏ち得たり。男子生れて、此に至る、亦以て偉とするに足る。君願くは瞑目せよ。五十年も一生也。三十年も一生也。百日紅の夏一夏を飾るも、花の一期、山櫻のばつと發きて、ばつと散るも、亦花の一期也。君はなほ朝陽に映發して、元氣よく散り行く山櫻の如き乎。男子むしろ太く短く、花々しくやつてのけて、惜まれて死なむ。君の勝氣なる、一日も懶眠する能はず。爲めに或は君の死期を早めしかも知るべからず。されども、君の短き一生を花々しからしめたり。亦何ぞ憾みむや。さるにても、無情なる明治三十五年の年波は、天下の秀才樗牛を誘ひ去つて、日本の文壇に深き恨みを刻めり。

君の本領は、いづれにありしか、知るべからず。されど、君は何事でもよし、唯花々しく

活動してのけむと期せしにはあらざる乎。君、一面は非常に熱す。加ふるに才情、才筆を以てす。君が本来の面目は、それ詩人的乎。されど、君はまた世才に長じ、常識に富む。而して冷かなる處あり。即ち、胸熱して、頭冷か也。君や亦傑出せる學者となり得べき能力を有せり。もし君の手より文と書物とを奪ひ去るも、君はなほ才物也。政治界に志したらむには、よしや大臣たるの貫目はなしとするも、少なくとも、沼南、蘇峰ぐらゐの成功はありしなるべし。されど、政治界に頭角を露はさむには、年效を要し、履歴を要し、多少の情實をも要す。單に力量のみにて、成功すべきに非ず。君は、そのまどろしきを厭ひて、念を政治に絶ちて、文壇に活動せしにはあらざるか。君は餘りに多角、多方面也。何事も、人より遙に傑出す。君が萬古不朽の大學者、大評論家、大文章家たる能はざりしは、年齢之を許さざりし也。少くとも今十年、壯健にして生存したらむには、學問界か、文學界かに、不朽

の大事業を印せしなるべし。君は學者としては、主として美學を研究せむとしたれど、君の病と君の夭折とは、終に君をして、美學上に新面目を開かしむるまでに成功せしめざりき。君が文壇に才筆を揮ひしは、生前にこそ花々しかりつれ。時代をつくるほどの影響はなかりしが如し。逍遙が小説神髓を著はして、日本の小説を一變したるが如き痕跡は残らざらむ。されど、少壯の身を以て、評論を獨占し、獨立闊歩、獅子頭を地に低れて吠えて、百獸をして走り且つ僵れしむるの觀を呈したるは、男子の能事畢れりと言はざるべからず。夭折したるは、命也。君願くは瞑せよ。

もし君の成功として稱すべきものを擧ぐれば、君の自から好まざる所にせよ、それ雜誌記者たるにある乎。君や、政治家とはなり得べきも、恐らくは、才物の域にして、眞に偉大となり得べきを保する能はず。君や讀書を好めり。又才筆を有す。到底君は筆と書物とを擲つ

べからず。もし單に學力のみを以てすれば、大學出身者の中にも、君にすぐれたる人少
 なからず。才筆のみを以てすれば、恐らくは、當代獨歩とまでは勝れたらざらむ。唯才學才
 筆兼備する點は、君は實に獨歩也。詩人的情熱をも有し、學者的思索力をも有し、世才も
 うとからず。氣がきよて、觀察奇警、識見凡ならず。筆を執れば、千言立ろに成り、才氣
 人を刺し、才情横逸す。學は哲學美學を主として、宗教、教育、歴史に及び、語學は英獨和漢
 に互り、東西の文學美術に通ず。文藝の評論家として、君ばかり適當なるものは、他に之を
 見ず。余や悉く君の論旨に感服する能はざりしかど、縦横の論、堂々の筆、恰も戰國策士の
 風あり。言ふ所曲りたるも、とにかく人をして傾聽せしむるに足るは、君の才力の非凡なり
 しを知るべし。如何に思想豊富、學識高遠なる人にもせよ、五六年もつゞけて、毎月數十頁
 の時文評論を草し居れば、いつも斬新の言を吐かむことは期し難きものなれど、君の論はい

よく出でよ、いよく新に、讀者は翹首して、毎月君の評論の出づるを樂しめり。かく
 て、君は常に文壇に問題を提供せり。君一たび口を開けば、反響よもに起る。群小批評家、
 こもく鋒を君にむけて、可と稱し、否と叫ぶ。君、よき敵と見れば鋒を交へ、木葉武者と
 見れば、一睨して過ぐ。壯なる哉。君が評論壇に於ける花々しき態度は、當年關羽が千里
 獨行せしにも比すべし。君を目して、雜誌記者として成功せるものと言はずんば、それ誰を
 か言はむ。嗚呼君にして不治の病にかよらず、依然として書を読み、美學を研究し、官位に
 戀々たらず、妄りに大學の教授とならむことを望まず。現世の地位は、布衣の一雜誌記者に
 甘んじ、益、識見を長ずるとともに、益、才筆を揮ひ、よろづを擲ち、一身をさよけて、之に
 熱中せしならば、明治の文壇は、いかばかり花々しかるべきぞや。惜しい哉、今や君即ち
 止し。

余は君を僂ぶの情切也。一々君を批評するに堪へず。されど、なほこの才人の爲めに、語る所あらざるを得ず。余は君の文章を愛讀するものと一人也。君の文は華麗より入りて、莊重に進めり。而かもなほ才氣を失はず。瀧口入道は、やよ浪六流の臭氣あり。我袖の記に至りて、體を西文に取りて、才筆才情を逞しうせり。清見瀉一篇に至りては、はじめて粉華を去りて、素顔の美人を露出す。文清楚にして、情哀切也。恨むらくは、君の美文の多からざるを。君は詩才を有しながら、など多く詩をつくらざりけむ。君の論文も、近松を評論せし頃は、才華爛發せしと共に、多少の穉氣もありき。日本主義を唱へし前後は、やや乾燥に傾きしが、月光美、平家雜感を草する頃には、愈々圓熟し來り、粉華を去りて、才氣を失はず。長篇は莊重にして堂々たり。短文は、鋭くして奇也。されど、なほ輕妙自在の趣は得ざりしが如し。君が評論家としての態度は、はじめは、成るべく、詩人的情熱を抑

へて、冷靜なる哲學者を粧へり。平家雜感あたりより、多情多恨なる才子の面目をほのめかし、美的生活、清盛論、日蓮論などに至りては、最早冷かなる哲學者にあらすして、温かなる詩人也。されど、君、詩人とならむには、餘りに才あり。學者とならむには、餘りに情あり。思ひ切つて放言を吐かむには、餘りに如才なし。君は竟に才子たるを免れず。晩年の作、煩悶の聲ありしを咎むる莫れ。蟲けらの類は、たよかれても音なし。虎や、獅子や、難に逢へば、怒號せざるを得ず。到底枯木冷灰となる能はざるまでに才氣と活氣とある樗牛が病中の作、虎獅の怒號に類するものあるも、亦止むを得むや。樗牛が學者もしくは評論家としての俤は、おもに明治二十八年以後の太陽に散見す。自からよりぬきて集めたるものは時代管見、文藝評論あり。世界文明史、近世美學なども、樗牛の爲めに重きをなすものなるべく、釋迦傳、清盛傳は、少年の讀物として作りしに過ぎざるも、なほ樗牛が筆の美なる一斑を伺

ふべし。

要するに、天折せし樗牛、雑誌記者として成功せりとは云ふものと、未だ十分にその能力を發揮したりとは云ふべからず。余輩は、文壇の爲めに、二豎の無情なるを痛歎せずんばあらず。余や曾て戯れに、樗牛と弔文を争ひしとはいへども、もと文章のみに就いて、多少の自信ありたりしに過ぎず。而して余の秃筆は、終に遺憾なく樗牛を弔すること能はず。あゝわれ終に筆を焚かむ哉。余や樗牛と學朋なるも、天分ことなれり。才や、學や、識見や、すべてに於て、君を友と呼ばむには、君は餘りにすぐれたり、樗牛や、何事も我師也。常に君の示教をうけたり。今や幽明界を異にして、また相見ること能はず。止んぬる哉。思へば、果敢なき人の世、今日は弔ふも、明日は弔はる。『明日知らぬ身と思へども暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ』と咏じけむ。樗牛を弔ふに當りて、この歌のただ切なるを感ぜずんばあらず。

常陸山に與ふ

常陸山君足下、われ深川の八幡祠畔に横綱碑を見る毎に、うたゝ感慨に堪へず。維新以前の事は、知らず。明治以後、角力の盛なるは、實に今日を以て第一となす。その角力の盛なる事の大なる一原因は、實に御身あるを以てなり。されど、角力は、獨りにては取れず。御身の強敵として、梅ヶ谷あり。御身あるが故に、梅ヶ谷益、勵み、梅ヶ谷あるが故に、御身の技、益、進む。御身と梅ヶ谷とは、明治の角力界の雙璧也。

余の趣味を以てすれば、余は、御身の角力振りに隨喜渴仰する者也。まづ御身の體格完全に發達して偉大也。顔付は、力士としては威嚴あり。武家の出にして、中等教育の素養あり

と聞く。その土儀の上の態度は、如何にも、どつしりとして、貫目あり。霸氣場を壓して、見る目も、痛快也。而かも機敏にして、粗笨ならず。所謂放膽と小心と、あはせ得たるもの也。われ、御身に於て、はじめて、所謂横綱らしき角力を見る也。

われ斯く御身の角力振りに随喜渴仰するにつれて、また大に悲まざるを得ざるものあり。他なし、御身に寄する年波也。演劇や、音楽や、年長じて、技益長ず。團藏は、近く七十歳にして、満都の大喝采を博せり。されど、體力は年と共に衰弱す。あはれ、御身の全盛はいつまでか續くべき。今までこそ、梅ヶ谷は、御身に對して弱味あれ。されど、年は若し。今日は人の身の上、明日は我身の上、幾年かの後には、弱味は、必ず御身に移らむ。駒ヶ嶽や、錦洋や、或は御身の上に出でむ。今や、櫻花、夢の間に散りて、新緑既にこまやか也。けに、花の盛りの短きにも似て、角力の盛りも短きものなる哉。知らず、御身は、力衰へて

も、なほ場の上らむとする乎。力衰へざる前に、早く善後策を講ずる乎。御身の氣象として、は、必ず、後者に出づるなるべし。

老衰せる力士が、年寄株を譲りうけて、年寄となるは、尋常一様の徑路也。御身にありては、容易の事なるべし。さは云へ、これ少數の有力者の事也。力衰へて老寄となる能はず、殆んど生活に窮するものも少なからず。中には幕の内より貧乏神に下り、二段に下り、三段にまでも下りて、漸く命をつなぐものもあり。それでも、幕の内を上りたるものは、まだ仕合せ也。一生、三段より上にのほる能はざるものも多かるべし。さるにても、鬼ヶ谷は、幕の内に入りしこと、二十餘年、第一流とはなる能はざりしかど、幕の内にとまりて、力士としての一生を終れり。その盛りの長かりしこと、他に比倫を見ず。一種の勇者といふべし。力士は、斯くあらまほしきもの也。大砲は、御身が横綱とならざりし前、既に横綱としての實

力はつきたりしかど、なほ昨今までも、凡俗の嘲笑をよそに、平氣にて、場を上りき。角力の爲めに盡したるものと云ふべし。われ大砲の雅量を多とし、鬼ヶ谷の勇氣を多とす。以爲へらく、この二人の如きは、力士としての一種の標本也。御身は如何なる善後策を講ずるか、もとより余の知り得る所にあらざれども、もし梅ヶ谷に負けぬ前にとて、逃げ支度をするならば、これ餘りに神經過敏也、卑怯也、凡俗の嘲笑を氣にしすぐるの小才子也。一身をいさぎよくするに急にして、角力に忠實ならざるもの也。一寸、氣が利きたるやうにて、却つて、天下の識者の同情を失ふべし。

御身は、さきに、海外に遊ぶこと、數月に及べり。余は、その、何の目的ありしかを知らず。もし、御身が老後、尋常一様の年寄たるを甘んぜずして、海外に角力の新領土を開かむとせしものとすれば、余は其意氣を壯とす。川上は演劇を以てし、天一は手品を以てし、山下七段は柔道を以てして、海外に成功したりき。角力も、そのやうに行けば、洵に結構なることなれども、西洋人が角力の趣味を解せむには、今日は、時機なほ早し。西洋人は、裸體畫を喜べども、實體の裸體を忌む。然るに、角力の美の一半は、裸體に在り。日本人は、在來は裸體畫を忌みながら、角力に實際の裸體美を感受せる也。單にこの一事を以てするも、今日の處、西洋人の趣味は、角力を目して野蠻の技と斥くること必せり。われ想像するに、御身の洋行は、角力の上には、恐らくは得る所あらざりしなるべし。

御身の歸朝するや、五月場所までには、十分、下稽古するの時日ありし也。然るに下稽古に熱心なりとの噂は傳はらずして、却つて、議員の候補者とならむとすとの噂傳はれり。これ、若し事實ならむには、大に滑稽也。苟くも常識あるものは、みな之を非難せり。御身請ふ深く反省して、その非難に、道理のあることを悟れ。力士必ずしも永遠に議員たるの資格

なしとせず。されど、今日の處、御祝儀に命をつなぐの力士は、紳士よりも、むしろ幫間の域に近し。斷じてこれ議會に國政を議するの資格なきもの也。今日の議員は、力士よりも幫間よりも下れる人なしとせざれども、我國は、力士までも煩はさねばならぬ程に、人材は缺乏し居らざる也。又他の方面より云ふも、角力を代表する議員の必要、いづくにか在る。果せる哉、御身は、候補者を辭したり。其辭したるは、賢也。辭せざる前に、候補者になつて見やうかとの野心を起さざらしめば、なほ更賢也。而して、洋行の失策は致し方なしとするも、歸來一心に下稽古を勵みなば、なほ一層賢也。これ實に角力に忠實なるもの也、日下開山の光榮を擔へる常陸山にして、苟くも己れの任務を知らば、當然斯くあるべき也。

御身は力士としては、餘りに小才が利き過ぎて、いつも腹の見えすぎたる小策畧を弄するやう也。一場所毎に、御身は、必ず苦情をもち出すが常也。新聞紙の報ずる所によれば、こ

の度の五月場所とても、例の苦情を持ち出して、半ばより出場せむと、だどを捏ねたるに、さらばその出場の日を初日とせむとて、御身は、小策畧のうらをかよれたり。御身、苟くも力士たる以上は、角力に忠實なれ。角力に忠實ならば、負くとも、同情あるべし。餘りに傲慢にして、我儘にして、小策畧を弄しなば、勝つとも、同情なかるべし。元來、角力は、二千年來の我國特有の技也。大和魂のあらはれたる一種の武技也。力士はその力士らしき處に、力士としての價値を見る。小俗才、小策畧は、却つて、力士としての人格を下すべし。

勝敗の決、もとより、あらかじめ知るべからざれども、この度の五月場所には、梅ヶ谷に六分の強味ありて、御身に六分の弱味あるべし。御身もし敗れなば、それは無理も無し。二年越し洋行して、稽古するに由なかりければなりと、所謂盲人千人は味方するかも知れざれども、常識あるものは、決して、そんな事では承知せざるべし。もしや敗れたりとも、それ

で、直に御身の相場がきまるものに非ず。角力に尙ふべきは、意氣地也。區々終局の勝負のみのものに非ず。荒岩を最負するもの多く、海山に同情を寄するもの少からざるは、日本人の氣質があらはれ居る也。請ふ、男らしく、梅ヶ谷と勝負を決せよ。余は切に御身の勝たむことを祈りて止まざるもの也。近年力士の風、漸く墮落し、やよもすれば、事に託して休場し、勝敗のみを氣にしすぎて、角力の根本の大和魂を失はむとするは、角力道の爲めに、なげかはしきこと也。御身苟くも、日下開山として世に立つ以上は、自から率先して、斯る弊風を一洗せむことを圖らざるべからざるもの也。

力士には、元來、小策略の必要なし。われ御身の爲めに圖るに、飽くまでも力をみがけ。力のあらむ限り鬪へ。いよく力盡きて、然る後に、年寄になるなり、何になるなりして、角力道の隆昌を圖れ。これ何の奇もなく、至極普通平凡の事なれども、力士として世に立ち

たる御身は、斯くして、力士としての終を全うする外には、斷じて他の道なき也。

谷風の名は、今の世にも、ひどき渡る。われ之を聞く、谷風はむしろ小野川に對して、土俵上には、多く敗を取りたり。されど、人格が立派なりしを以て、當時にも尊ばれ、美名、今にも傳はると。御身、よろしく谷風を學ぶべき也。谷風ならずとも、近く、鬼ヶ谷を學びて可也。大砲を學びて可也。われ茲に御身に對して、苦言を呈するは、御身の角力振りに戀れ込みたるを以て也。御身をして、眞の名力士として終を全うせしめむと思ふを以て也。願くは、之を諒とせよ。

福澤翁を弔ふ

病んで死に瀕せむとは、夢にも知らず、福澤翁の瘦我慢説を尤めしに、忽ち其訃音を聞く。

一言の弔詞なきを得ず。尤めしは、翁の一部分也。茲に翁の全體として、翁は君子に非ず、豪傑に非ず。されど、一種の偉人也。教育家として、明治の先覺者として、社會の指導者として、西洋文明輸入者として、一種の事業家として、又操觚者として、明治年間、最も大なるものよ一人也。幕府の末より明治の初めにかけては、類稀なる學者なりき。超凡の見識を懷きたる人なりき。文明の輸入、これ彼が唯一の目的にして、其一生の事業なりき。獨立自尊主義は、嘗に之を口にせしのみならず、之を實行し、且つ之を一貫したりき。

學者としての翁は、如何なりしぞや。日本外史、靖獻遺言、更に進んで四書五經が、唯一の學問なりし時に、彼は洋學を學びぬ。短袴高屐、腰に雙龍を横へて、勤王よ、攘夷よと呼號せし時に、彼は身を洋學に委ねぬ。彼は深遠なる學理を思索し、一家の新學說を考へ出すだけの頭腦を有せざりしかど、學問の幼稚なりし明治の初年にありては、洋學を傳ふるに足るだけ

の學力を有したり。彼は常識の最も圓滿に發達したる人也。其大なる常識を以て、事理を判斷し、社會を大觀す。これ其適とする所。せまき一學一藝の壺奧を叩くは、彼の常識の許さざる所也。彼は學問のすぐる人に非ず、常識のすぐれたる人也。彼は一種の偉人なれども、天才的偉人にあらずして、**常識的偉人也**。而して彼の常識は、社會を警醒し指導するに足りたりき。明治の初年以前は、彼はたしかに、唯一の社會の先覺者なりき。嘗に教鞭を執りて人を導きしのみならず、書を著はして、社會一般を指導せり。其感化、其勢力、其影響の如何に大なりしかは、今日の三十歳以下の人は、或は之を知らざるべけれど、三十歳以上の人は、苟くも多少の知識ある人は、皆之を認めざるものなかるべし。明治二十年以後、社會の學問進み、知識進むに至りては、翁は最早學者に非ず、又先覺者にもあざりき。されど、其著書其新聞に論ぜし言は、なほ一部分の崇拜者を有したりき。畢竟するに、彼の著書

は、學者の著書と云はむよりは、寧ろ社會先覺者の著書と云ふべし。而して其著書、明治二十年以前は、能く一世を風靡したりき。

教育家としての翁は、如何なりしぞや。彼は國語國史の素養なくして、國體を解せず、漢學の造詣深からずして、儒教の長所をも解せざりしかど、ひと通り西洋の學問を解し、西洋の事情を解し、殊に常識幾んど圓滿に發達して、一家の見識を有したりき。余の性情より云へば、彼の如き冷かなる人を喜ばず。されど、翁は人を教育して、偽善者を作らざりき。余は國體よりわり出されたる忠君愛國の説、儒教より出でたる仁義の説を唱ふる者を喜ばざるに非ず。然りと雖も、彼等の多くは偽善者也。口に仁義を唱ふれども、身には不仁不義を行ひ、忠君愛國の假面を被りて、外面を飾り、體裁を粧ひて人を欺けども、裏面には敗徳汚行充滿し、心には涙なくして、目には空涙をこぼし、言はよく美にして、行ひいよく非也。

かくて教育せられたるもの、偽善者にあらずれば、小慷慨家也、不平家也、淺薄なる厭世家也。社會の事業を建設せずして、破壊す。われ其弊害の多きに堪へざる也。翁の渴望せし所は、文明開化也。理想とせし人物は、社會有用の材也。彼はあまり道徳を口にせざりき。されど全く道徳を度外視したるにあらず。晩年世に出し、修身要領、以て彼が道徳に關する意見を伺ふべし。彼は國體流義、儒教流義の道徳を説かむよりも、社會の知識を増し、富を増し、完全にして圓滿なる社會を作らむことを急務としたりき。

これ亦一種の見識たらずんばあらず。なまじつか國體流義、儒教流義より養はれて、偽善者、小慷慨家、小不平家となり、口にばかり立派なることを云ふ人を作らむよりは、實際に社會に立ち働く人を作らむことの益多きに如かず。翁は口の人よりは、手の人を作らむより、實に慶應四年の未だ改元せられざりし時に慶應義塾たちてよりこゝに三十餘年、明治の半以前に

は、官の大學、野の慶應義塾と雙々相對立したりき。殊に大學が未だ多く有用の人物を出さざりし前、義塾より人才彬々として輩出したりき。銀行、諸會社、商業、實業、在野の政治家の中に、第一流の地歩を占めしもの、若しくは、有望なりしものは、大學出身者にはなくして、多くは義塾の出身者なりき。翁は實に社會有用の材を薰陶したりき。社會は長へに其大恩を記せざるべからず。而して翁は常に鞭を執りて人材を作りしのみならず、著書、新聞に、社會を教育せり、感化せり。十目の視る所、十手のゆびさす所、明治年間、第一の教育家は、翁にあらずして誰ぞや。

翁また操觚者としても世にすぐれたりき。著書に、新聞に、彼は多く筆を執りたりき。殊に彼は文章の大家也。其文章雄大にあらず。華麗にあらず。されど平明にして趣味ある大文字也。才氣縦横、意到り、筆隨ひ、步趨整齊、絶えて細工の跡を見ず。字を平易にし、句を簡明にし、奇を弄せずして自から奇、巧を弄せずして自から巧、渾成にして玲瓏、彼の徒らに字煉句烹、彫蟲琢刻を事とする小文士の比にあらず。明治の文壇に、一種の文體を創めたり。亦偉なりと云はざるべけむや。而して、六十餘年、野にありて、其人物の平民的なるが如く、其文章も亦平民的也。翁の人物文章能く相一致して、明治の社會を飾れり。

單に慶應義塾といふ、大なる、多く人才を出したる、隨つて社會に非常の影響を與へたる學校の創立者たるのみに止まるも、翁は既に偉大也。彼は亦時事新報といふ一種特色ある大新聞を發行し、新聞記者としても成功したりき。彼は一種の事業家にあらずや。而かも妄りに他に依頼せず、他の力を假らず、獨立自尊、明治の社會に闊歩せり。

翁今やなし。冷かなる一坏の黄土、長へに偉人の魂を埋めつくしぬ。大觀院獨立自尊居士と人物主義を名に負ひたる墓碑の立てる處は、即ち翁の遺骸のある處、花落ち、水流る。年

又年、知らず、國民は何をか此墓前に捧ぐべき。

棺を蓋うて名定まるとかや。翁の人物は高しと云ふべからず。寧ろ俗物也。唯其れ俗物也故に能く世俗に適切なる人材を養成せり。其主義を一貫して、始終渝らざりしは、翁を偉大ならしむる所以の一なるとともに、亦彼の缺點たらずんばあらず。文明輸入は、大なる功勞には相違なけれども、屋上屋を架し、下流益濁りて、終に西洋崇拜の弊に陥りしことありき。翁其責なしと云ふべからず。而して主義を一貫したる翁は、猪の如く直進するのみにして、毫もかへりみて弊害を除去すること能はざりき。一得、一失は、何事にも免れざる所なれども、非常なる功勞ありたると共に、亦多少の害毒を流したるものと斷言せざるを得ず。明治の初より既に富と云ふことに注目し、爵位よりも、虚名よりも、金が第一と喝破し、個人を富まし、社會を富まさむとつとめたりしは、時務を知れりと云ふべけれども、其弊黄金崇拜

を醸し、銅臭社會に滿ち、廉潔の風地を拂ふに至りぬ。翁また其責なしと云ふべからず。翁の常識は、幾んど圓滿に發達したりしかど、人は萬能なる能はず。惜むらくは、國體の美を解せざりき。楠公の討死を、權助の縊死と罵りしが如きは、一斑以て全豹を推すべし。正當なる獨立自尊、もとより喜ぶべきとなれども、眼中國家なく、皇室なきに至りては、日本國民として、決して之を許すべからず。況んや社會教育の大任を雙肩に擔へるものに於てをや。余は、翁の死後、直に罵倒するに忍びず。死屍を鞭うつに忍びず。余はたしかに翁の大なるを認む。翁の功勞多かりしを感謝す。其人物事業は、立志傳中の好材料たらずんばあらず。されど、西洋崇拜、黄金崇拜の弊を知らずく醸しだし、且つ國體に適せざる、寧ろ之を破壊する所信ありしことだけは、死にめんじても、なほ黙過する能はざる所也。翁の如き大なる人物にありては、其一身行爲は、さまで過失はなかるべけれども、其下流の凡人、もしく

は少年の士を誤まりしこと幾何ぞや。嗚呼翁を弔うて及ばず。書して門下の人才を戒む。終に臨んで、なほ一言せしめよ。翁はそれ廣き平野の如き乎。高山もなく大川もなし。金の出づる山あるにもあらねば、銀のいづる山もあらず。一望茫茫として、餘り趣味なきが如くなれども、畑も大く、田もひろし。穀物野菜こよに生熟する也。而して肥料の異臭も折々人の鼻を襲ふ也。〇ヤ、〇コ。

星亨を弔ふ

政治上に於ける星亨氏に就いては、余輩のよく評論すべき所に非ず。星氏は、政治上に於て、政友會の實際の首領なりしと共に、東京市教育會の會長なりき。今や圖らずも暗殺せられぬ。慘なる哉。

聞くならく、星氏は少時人相見に、劍難の相ありと言はれたりきとかや。あくまでも意志強くして、残忍且猛烈なる人は、手腕ありて、己を利して、味方を利すると大なると共に、敵多く、恨を買ふこと多く、従つて劍難を免れざることあるべし。面相は性格をあらはす。星氏の性格のあらはれたる面相を見て、劍難の相ありとは、必しもあてずつほうにはあらざるべし。世の所謂お人よしなるものは、毒もなきかほりに、働もなし。大に世に活動する人は、働きあると共に、また毒あるを免れず。而して其人の本心に、國家のため、社會のためと云ふ念慮あらば、横著、我儘、残忍、酷薄の所爲も、恕する所なかるべからず。星氏は明治年間、最も偉大なる人物の一人也。尾崎、林、松田、末松、片岡等の儕輩を壓し、板垣伯をして瞠若たらしめ、伊藤侯をさへ掌上に弄したりし人也。此人にして、社會の爲め、國家の爲めに活動せば、目ざましき大事業舉りけむを。惜しむべき哉。